

聖徒の道

9
1997



末日聖徒イエス・キリスト教会

聖徒の道



表紙

今月号では、テンプルスクウェアについての記事が、34ページから掲載されている。テンプルスクウェア伝道部は教会で最も特殊な伝道部の一つであり、大勢の姉妹宣教師がそこで奉仕している。ブラジル、サンパウロ出身のヨシャベル・ブラカル姉妹（裏表紙）もその一人である。「全世界に開かれた伝道部」44ページ参照（写真撮影／クレグ・ダイヤモンド）。

こどものページ

「洗たくの日」 絵／グレゴリー・シーバース

一般

- 2 大管長会メッセージ— 涙、試練、信頼、証
第一副管長トーマス・S・モンソン
- 8 神が定められたパートナー S・マイケル・ウィルコックス
- 10 チェコの聖徒たちが迎えた輝ける日 カーリル・メール
- 16 イジー・スネデルフレル、オルガ・スネデルフレル夫妻—
チェコの開拓者夫婦の足跡 マービン・K・ガードナー
- 34 テンプルスクウェア

青少年

- 28 真剣に考えるべき事柄 リチャード・G・スコット
- 33 モルモンメッセージ— 若いうちに知恵を得なさい
- 44 全世界に開かれた伝道部

定期特別記事

- 1 読者からの便り
- 25 家庭訪問メッセージ— 預言の賜物
- 26 生ける預言者の言葉

こどものページ

- 2 たんけん— ノブーに建てた神殿 シェリー・ジョンソン
- 5 歌 バプテスマを受ける時
- 6 小さなお友だちへ— ロバート・D・ヘイルズ長老
- 8 分かち合いの時間—
イエスはわたしに、何をしようのぞんでいらっしゃるでしょう
カレン・アシュトン
- 10 きのご拾い— オルガ・ブルガコバ・ペトレンコ作
- 13 おもちゃばこ
- 14 友だちになろう— チェコ共和国、プラハに住む
ルカーシュ・クロウチル コーリス・クレイトン



「こどものページ」10ページ参照



34ページ参照

本誌は、末日聖徒イエス・キリスト教会の公式刊行物です。本誌は以下の言語で出版されています。月刊—イタリア語、英語、オランダ語、サモア語、スウェーデン語、スペイン語、中国語、韓国語、デンマーク語、ドイツ語、トンガ語、日本語、フィンランド語、フランス語、ポルトガル語、ノルウェー語。隔月刊—インドネシア語、タイ語。季刊—チェコ語、ブルガリア語、ハンガリー語、アイスランド語、ロシア語。

大管長会: ゴードン・B・ヒンクレー、トーマス・S・モンソン、ジェームズ・E・ファウスト
十二使徒定員会: ボイド・K・バックナー、L・トム・ペリー、デビッド・B・ヘイト、ニール・A・マックスウェル、ラッセル・M・ネルソン、ダリン・H・オークス、M・ラッセル・バラード、ジョセフ・B・ワースリン、リチャード・G・スコット、ロバート・D・ヘイルズ、ジェフリー・R・ホランド、ヘンリー・B・アイリング
編集長: ジャック・H・ゴースリンド
顧問: L・ライオネル・ケンドリック、ウィリアム・ロルフ・カー

教科課程管理部責任者

実務部長: ロナルド・L・ナイトン
 企画・編集ディレクター: プライアン・K・ケリー
 グラフィックステレクター: アラン・R・ロイ
 ボーグ

国際機関誌スタッフ

編集主幹: マービン・K・ガードナー
 編集主幹補佐: R・バル・ジョンソン
 編集副主幹: デビッド・ミッチェル、ティエーン・ウォーカー
 編集補佐: ジェニファー・グリーン、ウッド
 工程管理: メアリーアン・マーティンデル
 出版補佐: ベス・デーリー

デザインスタッフ

機関誌グラフィックスディレクター: M・M・カワサキ
 アートディレクター: スコット・バン・カンペン
 デザイナー: シェリー・クック
 制作主幹: ジェーン・アン・ピーターズ
 制作: レジナルド・J・クリステンセン、デニス・カービー、マシュー・H・マックスウェル
 予約購読スタッフ

ディレクター: ケイ・W・ブリッグス
 配送部長: クリス・クリステンセン
 マーケティング部長: ジョイス・ハンセン
 聖徒の道1997年9月号第41巻第9号
 発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
 〒106東京都港区南麻布5-10-30
 電話 03-3440-2351

印刷所 株式会社 リック
 定価 年間予約/海外予約2,400円 (送料共)
 半年予約1,200円 (送料共)
 普通号/大会号200円

Copyright©1997 by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved. Printed in Japan. 英語版承認—1995年9月 翻訳承認—1995年9月 原題—International Magazines September, 1997, Japanese, 97989 300

●定期購読は、「『聖徒の道』 予約申し込み用紙」でお申し込みになるか、または現金書留か郵便振替 (口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会 振替口座番号/00100-6-41512) にて資料管理部配送センターへご送金いただければ、直接郵送いたします。●『聖徒の道』のお申し込み・配送についてのお問い合わせ…〒133東京都江戸川区西小岩5-8-6/末日聖徒イエス・キリスト教会資料管理部配送センター☎03-5668-3391

The *Seito No Michi* (ISSN 0385-7670) is published monthly by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 50 East North Temple, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A. and Canadian subscription price is \$14.00 per year. SIXTY days' notice required for change of address. INCLUDE ADDRESS LABEL FROM A RECENT ISSUE; CHANGES CANNOT BE MADE UNLESS BOTH OLD ADDRESS AND NEW ONE ARE INCLUDED. Send U.S.A. and Canadian subscriptions and queries to Salt Lake Distribution Center, Church Magazines, P. O. Box 26368, Salt Lake City, UT 84126-0368, USA. SUBSCRIPTION HELP LINE: 1-800-453-3860, U.S. EXT. 2947; CANADA EXT. 2031. CREDIT CARD ORDERS (VISA, MASTERCARD, AMERICAN EXPRESS) MAY BE TAKEN BY PHONE. PERIODICALS POSTAGE PAID AT SALT LAKE CITY, UTAH.

POSTMASTER: Send address changes to Salt Lake Distribution Center, Church Magazines, P.O.Box 26368, Salt Lake City, Utah 84126-0368, U.S.A.



もっと良い友達に

1996年11月号の「ジェニーの奇跡」を読んで、とても感慨深いものがありました。わたしは、良い友達のあまりいないジェニーとよく似た境遇の女の子を知っています。彼女は最近バプテスマを受けましたが、何人かの友達はまだ彼女とつきあいたくないと思うようになりました。わたしは友達になろうとしましたが、どうして彼女に優しくするのかと、しばしば尋ねる友達もいます。正直言って、返す言葉がありませんでした。あの話は、もっと良い友達になるためにはどうしたらよいか、考えさせてくれました。この次同じ質問をされたら、ちゃんと返事ができると思います。

匿名

会員を一つに

わたしはロシア、ウラル山脈のペルミに住んでいます。1996年3月に宣教師と出会いました。当時わたしは独りぼっちで、それまでの4か月間に夫と両親を亡くし、2回の手術を経験しました。宣教師は『モルモン書』、イエス・キリストの生涯、そして末日聖徒イエス・キリスト教会について教えてくれ、わたしを集会に招待してくれました。わたしは教会の会員たちと親しくなり、バプテスマを受けました。今ではわたしたちは、一つの家族のようです。互いに助け合い、つらい時期を乗り越えています。

わたしは『リアホナ』(ロシア語版)を1冊もらいました。そこには、わたしの人生にとって、またほかの人に教えるときに助けになることがたくさん載っています。世界中の会員たちから得る励ましと証は、いちばんの助けと

なります。教会が真実であることを、そして『リアホナ』は人々を一つにしてくれると証します。

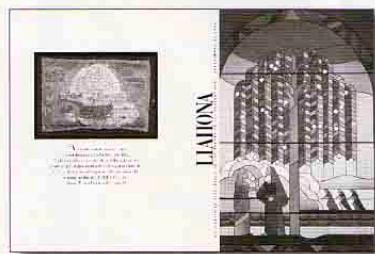
ロシア、エカテリンブルグ伝道部、
 ペルミ中央支部
 マルガリータ・アンドレイヤブナ・ルーサノバ

主の業を行う

現在、わたしは専任宣教師として主を代表する立場にあります。『リアホナ』(ハンガリー語版)を読むとき、わたしの証は強められます。わたしは主の業を行っており、回復されたイエス・キリストの福音は真実で、この福音はすべての人に救いをもたらすことを確信するのです。

わたしたちの預言者、ゴードン・B・ヒンクレー大管長に感謝しています。そして、救い主が大管長を通して、わたしを伝道に召してくださったことを知っています。

ハンガリー、ブダペスト伝道部、
 カシェーギ・サンドール・アダム長老



日々糧

『リアホナ』(スペイン語版)は、福音に従おうと日々努力するわたしにとって、ずっと支えとなってきました。ある日、わたしが祈りの答えを求めて、1996年9月号を読んでいると、裏表紙に載ったリーハイの命の木の示現を描いた刺しゅうに気づきました。わたしはすぐに、これが抱えていた問題の答えだと分かりました。『リアホナ』は鉄の棒であり、決してそこから離れてはならないことを教えています。

スペイン、マラガ地方部、
 マラガ第1支部
 ローザ・マリア・ガルシア・バエナ



涙, 試練, 信頼, 証^{あかし}

第一副管長
トーマス・S・モンソン

皆さんは人間の価値について考えたことがありますか。わたしたち一人一人の内に秘められた可能性について思いをはせたことがありますか。

十 二使徒定員会に召されて間もないころのことです。わたしはソルトレーク・シティーのモニュメントパーク西ステーキの大会に出席しました。同行してくださったのは教会中央福祉委員会の委員であったポール・C・チャイルド兄弟です。チャイルド兄弟は聖文に精通した方でした。わたしがアロン神権者の青少年だったころのステーキ会長でした。そんな彼とわたしが一緒にステーキ大会に訪問者として出席したのです。

チャイルド兄弟は自分の話の番になると、『教義と聖約』を片手に説教壇を降り、メッセージを伝えるため神権者の間に立ちました。そして、教義と聖約第18章を開いて読み始めました。「人の価値が神の目に大いなるものであることを覚えておきなさい。……あなたがたはこの民に悔い改めを叫ぶことに生涯力を尽くし、一人でもわたしのもとに導くならば、わたしの父の王国で彼とともに受けるあなたがたの喜びはいかに大きいことか。」(教義と聖約18:10, 15)

そしてチャイルド会長は聖典から目を上げて、神権者にこう尋ねました。「人の価値とは何でしょうか。」彼は監督やステーキ会長、高等評議員ではなく、一人の長老定員会会長を指しました。その定員会会長は、居眠りをして



タバナクルや神殿は石やモルタル、木やガラスだけでできているではありません。「あなたがたは神の宮であって、神の御霊が自分のうちに宿っていることを知らないのか。」(1コリント3:16)

いて質問をよく聞いていませんでした。

彼はびっくりしてこう答えました。「チャイルド兄弟、質問をもう一度言ってください。」チャイルド兄弟は質問を繰り返しました。「人の価値とは何でしょうか。」わたしはチャイルド兄弟のやり方を知っていたので、その長老定員会会長のために熱心に祈りました。彼は永遠と思えるぐらい長い時間じっと考えていましたが、やっこのことでこう言いました。「チャイルド兄弟、人の価値とは神のようになる能力のことです。」

出席した人は皆、その答えについて考えました。チャイルド兄弟は説教壇に戻ると、わたしの方に体を寄せてこう言いました。「すばらしい答えですね。すばらしいですよ。」そして彼はメッセージを続けました。でもわたしは、その靈感に満ちた答えについて続けて考えていました。

御父がメッセージを用意しておられるかけがえのない人々に手を差し伸べ、教えを説き、その心に触れることは、時として途方もない労力を要します。たやすく達成できることはほとんどありません。成功の前に涙と試練と信頼と証があるのが普通です。

救い主の次の教えが使徒たちにどれほど大きな影響を及ぼしたか考えてみてください。「それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し、

あなたがたに命じておいたいっさいのことを守るように教えよ。見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである。」(マタイ28：19-20)

救い主がこの教えを授けられた相手は、地主でもなければ学問を修めた人でもありません。平凡な人でした。信仰の人、献身の人、そして、「神から召され[た人]」(信仰箇条1：5)です。

パウロはコリント人にこう証しました。「人間的には、知恵のある者が多くはなく、権力のある者も多くはなく、身分の高い者も多くはいない。

それなのに神は、知者はずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者はずかしめるために、この世の弱い者を選[ばれた。]」(1コリント1：26-27)

アメリカ大陸では、アルマが息子ヒラマンに同じような勧告を与えています。「わたしはあなたに言う。小さな、簡単なことによって大いなることが成し遂げられるのである。」(アルマ37：6)

神の僕は今も昔も、救い主の「いつもあなたがたと共にいる」という励ましの言葉に慰めを受けてきました。

1830年4月、フィニアス・ヤングは預言者ジョセフの弟のサミュエルから『モルモン書』を受け取りました。そして、それから数か月後、フィニアスはカナダ北部へ旅行し、キングストンで回復された福音への証を述べました。これは、合衆国の国境を越えた地では初めてなされた証と言われています。

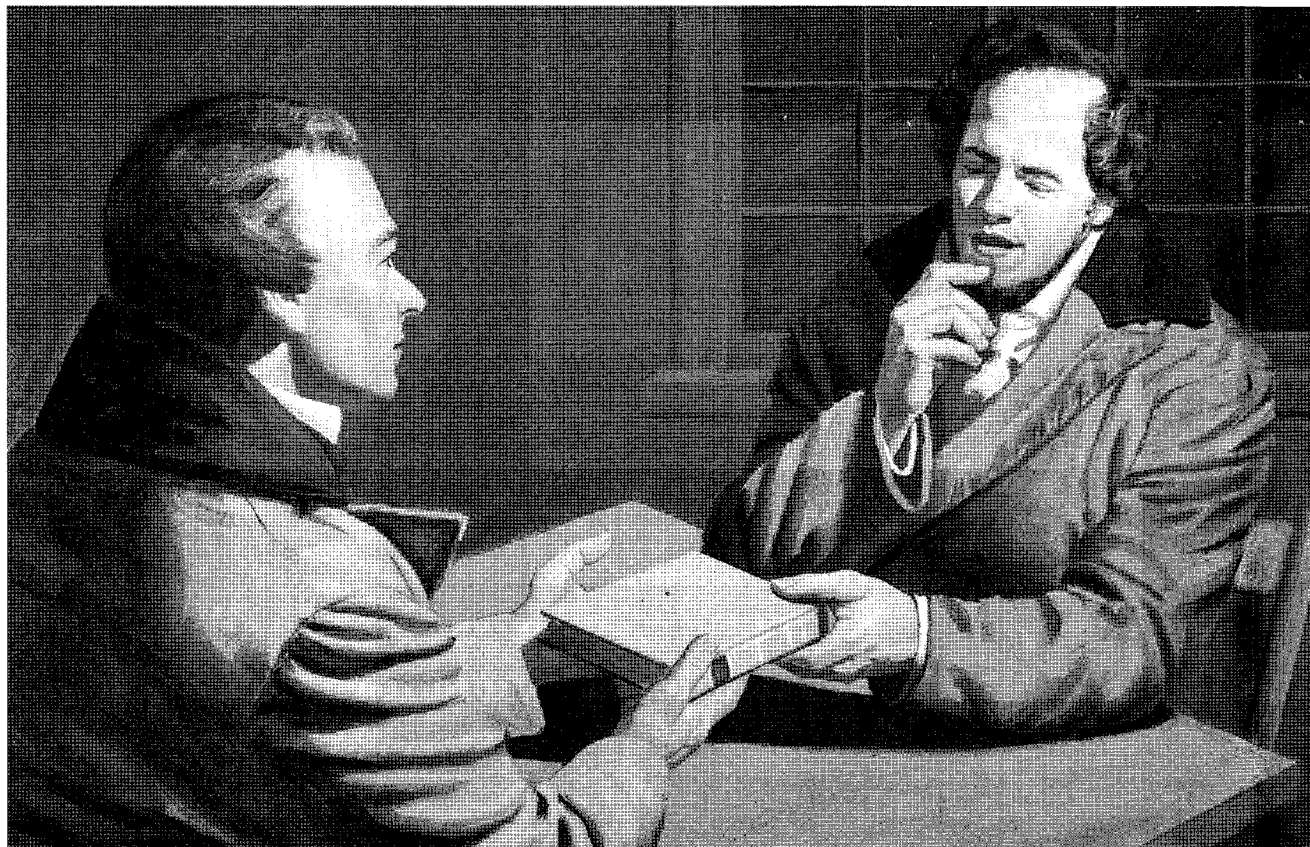
この壮大な約束は、執事や教師、祭司の定員会にあって指導者として働くアロン神権の兄弟たちを支えるものです。また、伝道地で主に仕えるための備えをするように彼らを励ましてくれます。だれにも訪れる失意のときに彼らを慰めてくれます。この同じ確信は、ワードやステーク、伝道部での業を導き管理するメルキゼデク神権者の兄弟たちをも啓発し、奮い立たせます。主は言われました。「それゆえ、善を行うことに疲れ果ててはならない。あなたがたは一つの大きいなる業の基を据えつつあるからである。そして、小さなことから大いなることが生じるのである。

見よ、主は心と進んで行う精神とを求めらる。」(教義と聖約64：33-34)

揺らぐことのない信仰、変わることのない信頼、そして熱烈な望み。これらは全身全霊をもって主に仕えようとするすべての人に見られる特徴です。

この精神は、福音の回復の後に行われた初期の伝道活動によく表れています。1830年4月、フィニアス・ヤングは預言者ジョセフの弟サミュエルから『モルモン書』を受け取りました。そして、それから数か月後、フィニアスはカナダ北部へ旅行し、キングストンで回復された福音への証を述べました。これは、合衆国の国境を越えた地では初めてなされた証と言われています。また1833年には預言者ジョセフ・スミス、シドニー・リグドン、フリーマン・ニッカーソンがカナダ北部のマウントプレザントに旅をしています。彼らはそこで福音を教え、バプテスマを施し、教会の支部を設立しました。1835年6月の一時期には、十二使徒のうち6人がカナダの地で大会を開いています。

1836年4月、ヒーバー・C・キンボール長老たちがパーリー・P・ブラットの家に赴きました。そして預言の霊に満たされた彼らは、ブラット兄弟の頭に手を置いてこう宣言しました。「あなたはカナダ北部のトロントの町に行きなさい。……あなたはその地で完全な福音のために備えられた人々を見いだすことでしょう。彼らはあ



なたを受け入れ、あなたは彼らの中に教会を組織します。……そして大勢の人々が真理の知識を得、喜びに満たされることでしょう。さらに、この伝道の成果を基に完全な福音はイギリスに広がり、そこで偉大な御業が行われるのです。」(Autobiography of Parley P. Pratt 『パーリー・P・プラット自叙伝』110) 1987年7月、イギリス伝道150年記念祭が行われました。わたしたちは彼ら初期の宣教師たちや、この末日の御業の発展のために務めを果たすべく主により備えられた人々の、目を見張るような働きに喜びを覚えます。

主の奉仕の業への召しは、まさに主の業の性格をわたしたちに教えてくれます。奉仕の業への召しが都合のいい時に来ることはまれです。召しはわたしたちをへりくだらせ、祈らなければという気持ちにさせ、決意を促します。召しが来ました、カートランドの地に。啓示が続きました。召しが来ました、ミズーリの地に。迫害が広まりました。召しが来ました、ノーブーの地に。預言者が亡くなりました。召しが来ました、グレート・ソルトレークの盆地に。苦難が訪れました。

こうした困難な状況の下での長い旅路は、確かに信仰の試しでした。しかし、信仰は試しという炉の中で鍛えられ、涙は信頼と証のしるしとなったのです。その犠牲を数え上げることができるのは、神だけです。その悲し

みを測ることができるのは、神だけです。神に仕える者の心を知ることができるのは、神だけです。それは今も昔も変わりません。

過去の出来事から得る教訓は、わたしたちの記憶を呼び覚まし、わたしたちの生活に力を与え、わたしたちの行動に指針を与えてくれます。わたしたちはしばしの間歩みを止めて、神が与えてくださった約束を思い起こす必要があります。「さて、あなたがたは……主の用向きを受けている。そして、あなたがたが主の思いに従って行うことは何であろうと、主の業務である。」(教義と聖約64:29)

こうした教訓は、多くの人々に親しまれたラジオとテレビのプログラム「デスバレー・デーズ(死の谷の日々)」の中で紹介されました。年老いた森林警備隊員である語り手は、まるでわたしたちの家の居間に来て話しているかのように、アメリカ西部で練り広げられたいろいろな逸話を語ってくれました。

その一つに、セントジョージのタバナクルの窓ガラスを手に入れるまでの様子を描いた話がありました。ガラスは東部で作られました。そしてニューヨークで船積みされ、そこから喜望峰を回る長くて危険な旅路を経てアメリカの西海岸まで運ばれました。箱に入れられたこの貴重なガラスは、そこからカリフォルニア州サンバナデ

イノまで陸送され、セントジョージまでの輸送を待つこととなります。

主のタバナクルを完成するために、数台の馬車を仕立ててサンバナディノまでガラスを取りに行くように命じられたのが、デビッド・キャンロンをはじめとする兄弟たちでした。問題が一つありました。窓ガラスの代金として、当時では天文学的な金額である800ドルを用意しなければならなかったのです。彼らにはお金がありませんでした。デビッド・キャンロンは妻と子供たちに向かってこう尋ねました。「お金が集まって、タバナクルのためにガラスが買えると思うかい。」

すると、彼の幼い息子デビッド・ジュニアが答えました。「パパ、きっとできるよ。」そして、自分の持っていた2セントを差し出しました。妻のウィルヘルミナは、女性ならだれもが持っている家の中の秘密の隠し場所から銀貨で3ドル50セントを出してきました。また、町の人々の協力も得て、合計で200ドルが集まりました。しかし、目的の金額にはまだ600ドル不足しています。

デビッド・キャンロンはため息をつきました。全力を尽くしたがだめだったという思いでした。デビッドの小さな家族は心労のため夜も眠れず、失意のため食事のものを通しませんでした。そこで彼らは祈りました。夜が明けました。御者たちが馬車を集め、サンバナディノに向けて出発する準備をしています。でも、600ドル足りないのです。すると、ドアをノックする音がしました。近くのワシントンの町に住んでいるピーター・ニールセンでした。彼はデビッド・キャンロンにこう言いました。「デビッド兄弟、わたし夢を見ましてね。それがなかなか頭から離れないんです。家を増築するためにためたお金をあなたのもとに持参しなさい、あなたはそのお金をある目的のために使うことになるだろう、とのことでした。」

幼いデビッド・ジュニアも含めて全員がテーブルの周りに集まると、ピーター・ニールセンは赤いバンダナを取り出し、その中から金貨を一つ一つテーブルの上に置きました。デビッド・キャンロンが数えると合計で600ドル、窓ガラスを買うために足りなかった金額と同じでした。それから1時間もしないうちに、男たちは皆に別れを告げると、セントジョージのタバナクルの窓ガラスを手に入れるためにサンバナディノに向けて旅立ったのです。

「デスバレー・デーズ」の放送でこの実話が紹介されたとき、デビッド・キャンロン・ジュニアは87歳でした。彼はその物語に一心に耳を傾けました。大人たちが驚き

兄弟姉妹の中で、人々のために奉仕をし、犠牲を払い、祝福をもたらす業に召される備えができていない、あるいはその能力がないと考えている人があれば、この真理を思い出してください。「神は、召す人をふさわしくされる。」^{しもべ}すずめの落ちるのさえ心に留められる御方が、僕の願いを顧みられないはずがありません。

の目で見守る中、金貨の一つ一つがまさに祈りの答えとしてテーブルに置かれる音が、彼の心に鮮明によみがえってきたのではないのでしょうか。

タバナクルや神殿は石やモルタル、木やガラスだけでできているわけではありません。特に使徒パウロが説いている神殿について、このことが言えます。「あなたがたは神の宮であって、神の御霊が自分のうちに宿っていることを知らないのか。」(1コリント3:16)このような神殿は信仰と断食によって、奉仕と犠牲によって、そして試練と証^{あかし}によって建てられるのです。

兄弟姉妹の中で、人々のために奉仕をし、犠牲を払い、祝福をもたらす業に召される備えができていない、あるいはその能力がないと考えている人があれば、この真理を思い出してください。「神は、召す人をふさわしくされる。」すずめの落ちるのさえ心に留められる御方が、僕の願いを顧みられないはずがありません。

わたしたちすべてが預言者ジョセフの次の呼びかけに快く応じることができるように願ってやみません。「兄弟たちよ、わたしたちはこのような偉大な大義において前進しようではありませんか。退かずに前に進んでください。兄弟たちよ、勇気を出してください。勝利に向かって進み、進んでください。」(教義と聖約128:22) □

ホームティーチャーへの提案

1. 御父がメッセージを用意しておられる人々に手を差し伸べるのに、時として途方もない労力を要することがある。
2. この業における奉仕の召しには祈りと決意が必要である。
3. 心から主に仕える人とは、変わらぬ信仰と信頼、熱烈な望みを持った人である。
4. 試練と涙の炉の中で鍛えられた信仰は、主への信頼と証となって表れる。
5. 神は召す人を神の用向きを果たすにふさわしくされる。



神が定められた パートナー



S・マイケル・ウィルコックス

結婚を数日後に控えて、娘がわたしのところへや
って来て父親からの祝福を求めたとしましょう。
そして娘の頭に手を置き、次のような祝福の言葉を述べ
たと考えてください。「あなたがいつも夫を慕い続ける
よう祝福します。あなたは、永遠にわたって夫とともに
いたいという思いを抱き、夫に対して愛と親しみを感じ、
良い伴侶でありたいと心から望み続けるでしょう。また、
彼は義と敬愛の中で家庭を管理するでしょう。」

このような祝福を受けたとき、娘は父親の愛を感じ、
これはまさしく天父からの祝福であると感じるでしょう
か。もちろんそうです。教会に属するすべての女性は、
この祝福に表されているような、心から愛し合える伴侶
との結婚を望んでいるはずで

この祝福は、墮落したエバに、主がお与えになったの
と同じものです。主はこう言われました。「それでもな
お、あなたは夫を慕い、彼はあなたを治めるであろう。」
(創世3:16) 残念なことに、この聖文の意味をよく理解
できない人や、聖文に記された原則を生活の中にうまく
応用できない人もいます。そしてそのような人々は、こ
の聖文が女性をおとしめるものだと感じています。また

一方で、妻を不義に支配する口実として、この言葉を誤
って用いる男性もいます。

この聖句が時に混乱を引き起こす理由の一つは、人々
が「治める」という言葉にばかり焦点を当て、実際にこ
の聖句の中心である「慕う」という言葉を見落としてい
ることにあります。「慕う」という言葉の本来の意味を
考えれば、その深い意味に気づくでしょう。「慕う」と
は、ともにいたいという思いを抱き、愛と親しみを感じ、
心から望み続けることを意味しているのです。

スペンサー・W・キンボール大管長は、「彼はあなた
を治める(欽定訳では『統治する』あるいは『支配する』)
であろう」という聖句の解釈に関して、次のような非常
に意義深い洞察を述べています。「わたしはこの『統治
する』あるいは『支配する』という言葉の使い方につい
て疑問を持っている。間違った印象を与えるからである。
わたしなら『管理する』という言葉を使うであろう。そ
れが夫のすることである。義にかなう夫は妻と家庭を管
理するのである。」(Ensign『エンサイン』1976年3月号, 72)

主がエバにこれらの言葉を語られたとき、主は彼女の
夫であるアダムについて話されたという事実を思い起こ



ADAM AND EVE TEACHING THEIR CHILDREN, BY DEL PARSON

す必要があります。アダムは、前世では天使長ミカエルでした。そして、エホバが地球を創造されるのを助けました。アダムは、この地上で最初の主の預言者であり、義にかなった神の息子でした。エバに対する神の祝福の言葉を、エバへの懲らしめの言葉だと解釈する人々がいます。彼らは、「エバは墮落した後、気高い夫の義にかなった愛によって見守られ、養われ、庇護を受ける」と主がエバに語られたことを理解していないのです。世によくあるこのような誤解により、多くの男性は、夫への妻の愛情を高めるような接し方をせずに、妻を不義に支配する口実としてこの聖句を引き合いに出します。

1993年10月に開かれた総大会で、十二使徒定員会のボイド・K・パッカー長老は次のように述べました。「人が『いかなる程度の不義によってでも、人の子らを制御し、支配し、強制』すれば、『神権に伴う誓詞と聖約』は破られます。そして『天は退き去り、主の御霊は深く悲しむ』のです。悔い改めなければ祝福は失われます。」（『聖徒の道』1994年1月号、26。教義と聖約84：39、121：37参照）

また、総大会に先立って行われた中央扶助協会集会で、

同じく十二使徒定員会のM・ラッセル・バラード長老はこのように語りました。「神はその預言者を通して、男性は神権を受け、父親となり、救い主がその教会を導かれたのと同じように、温厚さと清く偽りのない愛をもって義にかなって家族を導き、養うべきであることを示していらっしゃいます（エペソ5：23参照）。男性に与えられた第一の責任は、家族の霊的、物質的必要を満たすことです（教義と聖約83：2参照）。女性には子供たちをこの世に送り出す力があり、母親として愛ある霊的な環境で彼らを導き、はぐくみ、教えていくという第一の責任、そして機会が与えられています。夫と妻は神の定められたパートナーとして、それぞれに神から賜った力を尽くして助け合うのです。天父は男性と女性にそれぞれ異なる責任を与えることにより、成長し、奉仕し、進歩するための大いなる機会を用意してくださっています。天父は単に、家族について一つの固定的な概念を作るために、男性と女性にそれぞれ異なる責任を与えられたのではありません。家族を永遠に続くものとするという天父の永遠の計画の最終目標を確かなものとするためにそうされたのです。」（『聖徒の道』1994年1月号、101）□

チェコの聖徒たちが迎

カーリル・メール

かつてのチェコスロバキア時代に改宗した一握りの聖徒たちは、教会活動が再開される日までの数十年間にわたって信仰を持ち続けました。

現在はチェコ共和国、スロバキア共和国となっている旧チェコスロバキアの末日聖徒は1990年まで、戦争と共産主義という苦難の風のただ中であって懸命に信仰の炎を燃やし続けました。チェコスロバキア伝道部の歴史は、教会にとってスラブ系ヨーロッパ諸国における最果ての地で数十年間、祈りを込めて待ち続けた聖徒の物語です。

回復された福音が最初にチェコスロバキアにもたらされたのは、1884年3月にさかのぼります。ユタ州リーハイ出身のトーマス・ビーサンジャー長老がプラハに到着しました。公に伝道することは禁じられていたため、ビーサンジャー長老は日常的な会話を通して、人々が新しい宗教にどれほどの興味を持っているか調査する活動に従事しました。しかし、最終的にアントニン・フストにバプテスマを施しています。

1920年代に入ってもチェコスロバキアにおける教会の発展ははかばかしくありませんでした。宣教師の人数の

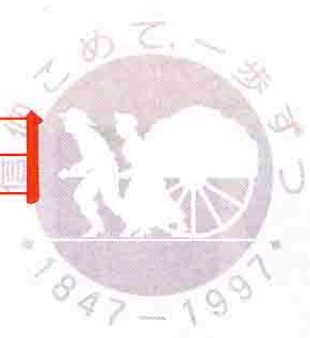
乏しさ、言語の壁の厚さ、政府からの絶え間ない反発、そして教会に関するうわさと誤った情報が障害となっていました。

1928年にトーマス・ビーサンジャーはチェコスロバキアに戻って短期間の伝道に従事する召しを受けました。当時すでに83歳になっていたビーサンジャー長老はプラハの警察署と政府を訪れて、伝道活動の許可を求めました。この許可請求に対して意外なことに反対がまったくなかったため、長老は伝道の道が開かれていることを報告しました。

やがてビーサンジャー長老は解任されましたが、後任となる宣教師はだれも派遣されませんでした。フランチスカ・ベセラ・ブローデイロフ姉妹は宣教師の派遣を求める手紙をヒーバー・J・グラント大管長に書き送りました（『チェコスロバキアで受け継がれる伝道精神』『聖徒の道』1995年9月号、26-27参照）。このような経緯から、長身で、元気いっぱい青年アーサー・ゲースが同地に派遣されることになり、彼女の願いはかなえられました。報道関係における経験と力強い声を持つゲース長老はわずか10日間で、チェコ語で10分間話す二つのラジオ番組、ドイツ語のラジオ番組、ドイツ語による成



え た 輝 け る 日



人教育機関で講義する機会、ドイツ語の新聞に記事を投稿する機会を獲得しました。

1929年7月に、当時十二使徒定員会会員でヨーロッパ伝道部の部長であったジョン・A・ウイツォー長老は、教会指導者と5人の宣教師とともにプラハへ到着しました。そして7月24日の早朝、一行は600年の歴史を持つ壮大な城がそびえ立つカルシュテインに近い緑豊かな丘に立ちました。雨雲の切れ目から太陽の光が注がれる中で、ウイツォー長老はチェコスロバキアを伝道の地として奉献する祈りをささげました。ウイツォー長老はスラブ系民族が住むヨーロッパで最初の伝道部を設立することを宣言し、ゲース長老を伝道部長に任命しました。

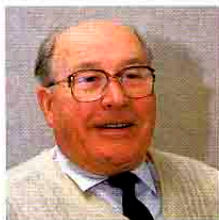
それから2年間もたたないうちに、大半が宣教師の執筆による250に上る記事がチェコ語の新聞と雑誌に掲載されました。1929年10月に伝道部は初めてチェコ語による小冊子を印刷するとともに、配布する許可を当局から受けました。

しかしゲース部長が伝道部長として務めを十二分に果たすためには、一つ欠けているも

のがありました。それは伴侶^{はんにょう}がいないことでした。ウイツォー長老は、ゲース部長にマルタ・クラリチェコバーを紹介しました。彼女の父親はチェコスロバキアのトマーシュ・マサリク大統領と親交のある人でした。ゲ

ース部長は1931年にマルタにバプテスマを施し、そして結婚しました。マルタが持っていた人脈を通じて、ゲース部長夫妻はチェコ人社会において影響力を発揮するようになりました。二人はプラハの新興住宅地で大きな住宅を手に入れて、そこを伝道本部としました。

教会員の数はゆっくりと増加していました。折りしも大恐慌による経済的な問題から、宣教師の数は世界的に限られていました。大恐慌の影響と教会に対する偏見という障害があ



オタカル・ボイクーフカ（上）をはじめとするブルノの会員たちは長年にわたり夏季公開キャンプ（中）を指導して、福音の種をまいた。左—ドイツのフライベルク神殿を背にするマーティンおよびエラナ・ピルカ。下—プラハ市内の眺望。





PHOTOGRAPHS BY ROBERT J. SANTHOLZER, MARVIN K. GARDNER, AND COURTESY OF MARION MILLER



1929年にジョン・A・ウィットナー長老により奉獻の祈りがささげられ、1991年にラッセル・M・ネルソン長老により再確認の祈りがささげられたカルルシュテイン城近くのプリースツ・ヒル。聖徒たちはここに記念碑を建立して、毎年訪れるのを恒例としている。円内——32年間伝道部長を務めたウォレス・F・トロント。

ったものの、伝道活動は多少なりとも成果を上げていました。1933年2月にはチェコ語の『モルモン書』が3,000冊印刷されました。そのうち100冊はチェコの図書館に寄贈され、そしてさらに多くの部数の『モルモン書』が国の指導者に贈呈されました。第二次世界大戦が勃発するまでに128人のチェコ人がバプテスマを受けました。

1933年5月にはチェコで最初の支部長会が組織され、ヨセフ・ロハーチェクがプラハの支部で第一副支部長に召されました。そのほか、第二次世界大戦までにブルノとムラダー・ボレスラフ／コスモノスイにおいて支部が組織されました。

アーサー・ゲースはドイツで3年、チェコスロバキアで7年、合計10年間の伝道を終えて解任されました。1936年にチェコ伝道部の部長に召されたウォレス・トロントは32年間この召しを務めました。教会歴史上これほど長い間部長を務めた人はほかにいません。トロント部長の働きによって1937年7月に当時81歳だったヒーバー・J・グラント大管長をチェコに迎えることができました。預言者の訪問は地元の新聞に採り上げられ、40の記事が掲載されて、教会の名を国中に広めるのに貢献しています。

教会はチェコスロバキアに平和が続いた時代に根を下しました。しかし1933年には早くも暗雲が漂い始めたのです。一人の宣教師はこのように記録しています。「今日の伝道はとて大変だった。わたしの話に耳を傾けてくれる人は一人もいなかった。人々の間でささやかれるのは、昨日ドイツの首相になったヒトラーということばかりだ。このことがチェコスロバキアにどのような影響を与えるのかをだれもが心配しているようだ。」

紛争が深まるにつれてバプテスマの数は激減しました。宣教師たちの安全を危惧した大管長会は最終的に、

全員をスイスへ移動させることにしました。チェコ政府はすべての集会を禁止しました。そして1938年9月に、伝道部は閉鎖されました。

1938年9月に調印されたミュンヘン条約によって戦争の危機は一時的に回避されましたが、ズデーテン地方はドイツに併合されました。国外へ脱出していたトロント部長は10月にアサル・モウルテン長老とともにチェコスロバキアへ戻り、宣教師たちが戻るまでの間支部の責任を地元の指導者（ブルノはヤロスラフ・コトゥシン、プラハはヨセフ・ロウビーチェク）にゆだねました。このような状況に置かれていたにもかかわらず、伝道部は1939年2月までにジェームズ・E・タルメージ長老の『信仰箇条の研究』を翻訳し、出版しています。

1939年3月、ドイツ軍は電光石火のごとくチェコスロバキアに侵攻し、占領下に置きました。このようにして、通常の伝道活動は再び中断されました。5月にプラハ支部で母の日を祝う集会を開いていたところ、一人のドイツ軍将校が集会所に入って来ました。会衆は恐怖のあまり身動きできず、だれもが最悪の事態を予想しました。けれども、その将校は教会員であって、礼拝するために訪れたことを説明しました。将校は自分の国の敵にではなく、同じ宗教の友に対して証を述べました。

1939年7月にドイツ国家秘密警察は4人の宣教師を逮捕しました。彼らはトロント部長が釈放の交渉を成功させるまでの40日間、パンと水だけで命をつなぎました。8月24日、教会本部はチェコスロバキアに残っていた少数の宣教師に対して出国するようとの指示を与えました。トロント部長はまず家族を先に出国させると、宣教師の出発の手配と伝道部の業務を処理するために自身は数日間残ることにしました。そして、21歳のヨセフ・ロウビーチェクを伝道部長不在の間の管理者として任命しました。当時十二使徒定員会会員だったジョセフ・フィールディング・スミス長老は、そのときデンマークを訪問していました。スミス長老はそこで出会ったトロント姉妹に対して、彼女の夫である伝道部長と宣教師が全員無事に出国するまで、戦争が始まることはない約束しました。トロント部長はヨーロッパが戦闘状態に突入する直前に出発した最後の列車に乗り込んでいます。

伝道部長代理を務めたヨセフ・ロウビーチェクは戦争中も86人の会員が国内にいることを知っていました。彼は追放、破壊、恐怖の中で信仰と勇気を持ち続けるよう会員たちを励ましました。「会員たちはこのような大きな紛争によって最悪の事態に置かれていても、福音が真

実であるという証^{あかし}を決して揺るがすことはありませんでした」とロウビー・チェック兄弟は記しています。

1946年3月に、当時十二使徒定員会の会員であったエズラ・タフト・ベンソン長老がチェコスロバキアを訪れました。ベンソン長老はチェコの人々が元気に働いており、また教会も国家と同様に元気を回復している様子を目にして安堵の気持ちを覚えていました。戦争中にも10人のバプテスマが行われていました。ベンソン長老は政府当局を訪れて、伝道部の再開を打診したところ、教会員はすばらしい評判を得、国から歓迎されながら伝道が再開されることを知らされました。1946年6月28日、ウォレス・トロントを含む3人の宣教師が再入国しました。トロント部長は戦時中も伝道部長を解任されていませんでした。7年もの長きにわたって、宣教師たちとの再会を待っていた会員たちは、このようにして、願いがかなえられたのでした。

教会員は全国民と同様にあらゆる苦しみに耐えました。例えば、1932年に改宗してバプテスマを受けたユダヤ人のエルフリーダ(フリーダ)・グラスネロバー・バニェコバーは、夫と二人の息子とともに2年間を強制

収容所で過ごしました。そして死刑執行が予定されていた当日にフリーダは解放されたのでした。トロント部長が病院で手当てを受けている彼女を訪問したとき、フリーダは部長と会えた喜びに泣き崩れました。フリーダの親戚のうち11人がアウシュビッツで命を奪われていました。生き延びたフリーダは信仰を共にする人々と再会しました。後に二人の息子はバプテスマを受けました。

第二次世界大戦後の3年間に149人のチェコ人が教会に加入しました。しかしチェコスロバキアの自由も長くは続きませんでした。1948年2月に、共産主義者が政権を掌握したことによってすべてが変わりました。宣教師は秘密警察の厳重な監視下に置かれました。伝道部の機関誌『ノビ・ハラス(Novy Hlas)』は警察から発刊を禁止されました。教会で行う説教もしばしば検閲を受けました。会員たちは教会の集会に出席することによって、失業することと食料の配給を減らされることを覚悟しなければなりませんでした。

1949年に、共産主義政府は宣教師の入国を制限し始めました。にもかかわらず1948年は28人だったバプテスマの数は1949年には70人へと増加していました。イジー・



左——ペトル・カサンと彼の家族。右——チェコ共和国の伝道部および地方部指導者のラドバン・チャネク、ヨセフ・ポドリブニー、ガド・ポイクーフカ。下——通訳のカリン・ヘルマンスカ、宣教師のエディス・グローサー、神経外科医のアリツェ・ノバーコバー



スネデルフレルもこれらの改宗者の一人でした（本誌「イジー・スネデルフレル、オルガ・スネデルフレル夫妻——チェコの開拓者夫婦の足跡」16参照）。

1950年1月下旬に二人の宣教師が行方不明になりました。二人の消息はそれから11日間まったく分かりませんでした。二人は国境付近の禁止区域に立ち込んだかどで逮捕され、スパイ容疑をかけられていました。共産主義政府当局者は宣教師全員が国外退去することを条件に、投獄されていた二人を釈放しました。そして1950年4月6日にチェコ政府は伝道部の閉鎖を命じました。

それから14年間、公に礼拝することを禁止され、国境を越えて教会と定期的に接触を図ることが禁じられていたチェコの会員たちは自力で信仰を守り続けました。トロント部長はユタ州の自宅から、できる限りの援助を続けました。チェコの会員たちと連絡を取り、金銭的な支援、衣類、医薬品、教会の出版物を送りました。この14年間にトロント部長はチェコのビザを9回申請しましたが、すべて拒否されました。

教会が正式な形でチェコスロバキアに再度入ることができたのは1964年になってからでした。スイス伝道部のジョン・ラッソン部長とチェコスロバキアの初期の宣教師リン・ベティートがプラハに到着しました。彼らが入国したというニュースは会員たちの間に伝えられました。そして、会員の家に少数の人々が集まって、入国を記念する証会あかしかいが開かれました。

しばらくして、デビッド・O・マッケイ大管長は、ウォレス・トロント部長にビザをもう一度申請してみるように助言して、こう言いました。「[会員たちは]人目を忍んでの信仰生活をもう十分に経験しました。彼らは部長の権能を必要としています。」トロント夫妻は1週間でビザを取得しました。部長夫妻はブルノとプラハの会員たちを訪れることができました。

1965年7月にトロント部長は教会を再度組織する目的でプラハに戻りました。多数の政府関係者から歓迎を受けたのですが、部長は秘密警察によって逮捕され、国外退去処分を受けました。伝道部の再建計画はまたもや暗礁に乗り上げました。新しい自由の時代が訪れるまでそれからさらに25年間も待たなければならなかったのです。

1968年にトロント部長が亡くなると、かつてチェコスロバキアで伝道したウィリアム・サウスと妻のジェーン・プロディル・サウスはチェコの会員たちの信仰を維持する手助けをする召しを受けました。二人は毎年チェコスロバキアを訪れました。1977年にサウス部長の健康

状態が悪化したため、同じくチェコスロバキアで伝道したカルビン・マッコンバーと妻のフランシス・プロディル・マッコンバーにこの責任が引き継がれました。マッコンバー部長は1980年に亡くなるまでこの召しを務めました。

1972年にドイツ・ドレスデン伝道部のヘンリー・パークハート部長は、イジー・スネデルフレルに、チェコスロバキアに住むすべての会員と連絡を取り、集会を始める責任を与えました。オーストリア・ビエナ伝道部のエドウィン・モレル部長は1984年にチェコ語の『モルモン書』を再版して、チェコスロバキアに持ち込みました。ブルノでは、オタカル・ボイクーフカが個人的に福音を教えて、多くの人々を教会に導いていました。1982年にバプテスマを受けたオルガ・コバージュビー・ツァムボラは、会員伝道によってその後8年間に47人の人々をバプテスマに導いています。

1985年のドイツのフライベルク神殿が奉献されてから、チェコスロバキアのバプテスマは年間20パーセントの上昇を示しています。この東ヨーロッパにおける最初の神殿は共産主義世界にも福音が浸透していることの象徴となりました。

1985年に十二使徒定員会のラッセル・M・ネルソン長老は東ヨーロッパにおける伝道活動を監督する責任を受けました。ネルソン長老は教会が法律的に認められて、集会を正式に開くことができる団体とするために毎年チェコスロバキアを訪れて申請しました。しかしネルソン長老は訪問する度に申請書は検討中であるという返事を受けました。地元の教会指導者も請願書を提出しました。

1989年5月のチェコスロバキアはいまだ共産国でした。しかしそれから11月までに、共産圏社会に変化の風が吹き始めました。1990年1月には国中のすべての宗教組織に対して宗教上の自由権が確立され、2月に入ると、当教会を承認する文書が交付されました。そしてネルソン長老は1990年2月6日にカルルシュテイン近郊の丘へ赴き、60年前にウィッツォー長老がささげた祈りを確認するとともに新たな奉献の祈りをささげました。

40年間の空白を経て、1990年5月に宣教師たちはチェコスロバキアに入りました。1990年7月1日に教会は正式にチェコスロバキア・プラハ伝道部を再組織しました。（現在はチェコ共和国プラハ伝道部となっている。）1991年6月にモルモンタバナクル合唱団は歴史的に由緒のあるプラハオペラ劇場で演奏会を開きました。この模様は全国にテレビ放送されています。かつては生き残るために周囲から隠れざるを得なかった教会が今や、チェコス



PHOTOGRAPHS BY MARVIN K. GARDNER, CRAIG DIMOND, AND OLGA KAVÁŘOVÁ CAMPORA

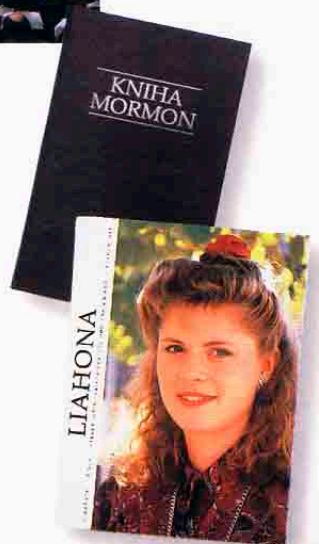


上—フライベルク神殿の前に立つチェコの聖徒たち。1994年。左—プラハのスメタナホールにて行われたタバナクル合唱団の演奏会。1991年6月。；改宗者と宣教師。1990年。下—オルガ・コバージュビー・ツァムボラ、『モルモン書』、チェコ語の『リアホナ』創刊号（1993年6月号）。

ロバキア全土の人々にテレビを通じてその存在を知られるようになりました。1993年6月にはチェコにおける教会の正式な機関誌『リアホナ』の創刊号が出版されました。

チェコ共和国プラハ伝道部の教会員は現在1,700人を超えています。改宗者の大半は18歳から30歳の間の若い人々が占めています。彼らは十分な教育を受け、新しい信仰の道を力強く歩んでいます。専任宣教師を経験した人々あるいは現在専任宣教師として働いている若者が大勢います。そして年配の会員もいます。孤立と反対の中を数十年にわたり、信仰を守りながら生き抜いてきた人々です。これらチェコの教会員はともにより明るい将来を目指して信仰の旗印となっているのです。□

この記事で引用された文献の英文の出典リストを希望される方は、International Magazines, 50 East North Temple, Salt Lake City, Utah 84150, USAまでお申し込みください。



イジー・スネデルフレル, オルガ・スネデルフレル夫

チェコの開拓者夫婦の足跡

マービン・K・ガードナー

チェコ人のイジー・スネデルフレルは40年以上にわたって、末日聖徒イエス・キリスト教会の会員であるがゆえに監視、尋問、迫害を受けました。彼は何度も共産党の指導者に会い、この教会が正式に認可されるように申請を重ねましたが、屈辱的な扱いを受け、結局は却下されるだけでした。

10代のころにバプテスマを受けて以来ずっと、自分の証に忠実だった彼と奥さんのオルガは、共産党の一方支配が始まった後に、宣教師と教会がチェコスロバキアから撤退するのを目の当たりにしました。二人は40年以上、故国の隅々の教会員のために静かに奉仕し、彼らを励まし、宗教に敵対的な環境の中で信仰を守り通そうと努めました。

1988年にイジーは教会の指導者から、「彼がいっそうの努力をするなら政府は方針を変えて、教会を正式に認可するでしょう」と言われました。彼は自分の家族の身の安全、自分の職業、自由、そして恐らくは命さえをも危険にさらしていましたが、一瞬のためらいもなく、こう言ったのです。「わたしは行って、行きます」奥さんの肩を抱きながら、彼は言いました。「わたしたちは、必要なことは何でもします。これは主のためですし、主の業は、わたしたちの自由や生命よりも大切なのですから。」

スネデルフレル兄弟がその申請を出すと、彼とほかの教会員たちが長い間耐え続けていた嫌疑の目や迫害がいっ



そう厳しくなりました。十二使徒定員会のラッセル・M・ネルソン長老が言ったように、チェコの「聖徒たちは勇氣と信仰を堅持し」ました。ネルソン長老は七十人のハンス・B・リンガー長老とともに、数年にわたり、正式な認可が与えられるように、何度も申請を繰り返していました。ネルソン長老はこう付け加えています。「定期的に断食と祈りを繰り返し、求められていることはすべて守って、あの栄えある認可の日を迎えたのです。スネデルフレル兄



妻



スネデルフレル夫妻が福音のために払った犠牲は、チェコスロバキアの教会員たちが共産党の支配の下、40年以上にわたって払ってきた犠牲を象徴している。左ページ——フライブルク神殿の神殿長夫妻として。

PHOTOGRAPHY ON PAGES 16-17 BY MARVIN K. GARDNER;
PHOTOGRAPHY ON PAGES 18-24 COURTESY OF JIRI AND OLGA
ŠNEDEFLEL

弟姉妹をはじめとする雄々しい会員たちに、心から敬意を表します。彼らは度重なる事情聴取や危険を耐え抜いたのです。』(『聖徒の道』1992年5月号、14-15参照)



上——1965年の家族の写真——イジー、娘のダニエラ、息子のペトル、オルガ。
下——1965年にプルゼニの教会員宅で開かれた集会の後で。ウォレス・F・トロント伝道部長(前列右)、マルタ夫人とともに(前列左から3人目)。



スネデルフレル兄弟には英雄ぶったところは少しもありません。「わたしのことを英雄だというような言葉を聞いたり読んだりしたことが何度かあります。でもわたしはそう思いません。共産党から常に脅威を受けて生活していたわたしたち教会員は、あるときを境に、それを脅威と感じなくなりました。常にそのような危険と隣合わせの生活を強いられていると、危険が危険でなくなるのです。それがごく普通のありふれた生活になってきます。わたしがしてきたのは、特別なことではありません。ほかの教会員でも、同じ情

況にいたら、わたしと同じようにしたと思います。」

「わたしは教会について もっと知りたいとすぐに思いました」

イジー・スネデルフレルは1932年4月24日に、チェコスロバキアの西ボヘミアにある都市プルゼニで生まれました。子供時代は母親から厳格に宗教的なしつけを受け、14歳のときには、宗教についての集中学習を終えたことで教区の司祭から修士証書を与えられました。

1948年の9月に、二人の友人が16歳のイジーにモルモンの宣教師の講演を聞いたという話をしました。イジーは彼らと一緒にその次の講演会に出席しました。イジーはそのときの印象をこう語っています。「宣教師たちは若く、親切で、とても楽天的な人たちでした。わたしは教会についてもっと知りたいとすぐに思いました。その集会で聞いた話に気持ちを高められ、彼らが教えている教えを熱心に勉強しようと心の中で決めました。」

それから7か月して、17歳の誕生日である1949年4月24日、日曜日の朝早く、イジーと彼の二人の友人は、4人の宣教師や二人の地元の会員と一緒に、路面電車でローホーティンの終点まで行き、そこから45分徒歩でカムニッキー池まで進みました。

イジーはその日を思い起こしてこう話しています。「氷点下5、6度で木も草も霜で真っ白でした。わたしたちは意を決して、その美しい自然に囲まれた池の中に入り、主と聖約を交わしま

した。」彼らはバプテスマを受け、水辺で確認の儀式を受けました。「それはわたしたちの人生の中で最もすばらしいときの一つでした。」

ブルゼニの支部の教会員はわずか7人でした。その年の暮れになってイジーは執事に聖任され、やがて祭司になりました。しかし翌年、共産党によって教会の活動が禁止され、伝道部は閉鎖されました。18歳のイジーとほかの教会員たちは支部を守ろうと努力しました。20歳のときに、イジーは副支部長になりました。「わたしたちは会員の自宅ですできるだけ多くの人数で集会を持つようにいつも努力しましたが、秘密警察からの圧力は非常に強くなって、それはとても難しいことでした。」

「家にいるみたい」

イジーは22歳のときに、オルガ・コザーコバーと結婚しました。イジーと同じように、オルガも10代のときに、宣教師の話聞いていた学校の友達から教会のことを知らされました。「その講演会に出たとき、わたしは心にとても温かいものを感じて『家にいるみたい』って言ったほどでした。」オルガはイジーがブルゼニでバプテスマを受けた6か月後に、プラハでバプテスマを受けました。

イジーとオルガは後に、各地の支部から若い人たちが集まる社交行事で出会いました。毎年7月24日に教会員たちはカルルシュテイン城近くのプリースツ・ヒルに集い、1929年7月24日のジョン・A・ウイツォ

ー長老がそこで奉献の祈りをしたことを記念していました。時には、若い教会員たちが様々な行事、競技会、聖文の学習などをすることもありました。イジーとオルガは1954年4月24日に結婚しました。その日はイジーの22歳の誕生日であり、5回目のバプテスマ記念日でした。

それから間もなく、イジーは徴兵制度による兵役に就きました。教会員だったために国家の敵と見なされたイジーは、兵士としてではなく、軍隊の中の労役に就かされ2年の期間を過ごしました。主に頼って力を求めた彼は厳しい労役に耐え、「健康な体で、信仰も強められて」市民生活に復帰しました。

ブルゼニの家に戻った24歳のイジーは、支部長のポフミル・コラル兄弟とともに教会員を訪ね、励まし、信仰を強めました。1965年、33歳のイジーは長老に聖任されました。

教会員への迫害は相も変わらず続けられました。教会員たちはよく秘密警察の尋問を受けました。イジーはこう話しています。「あるときなどは、6時間もの尋問を受けたことがあります。彼らは脅迫や威嚇といった手段で、わたしたちの信仰をぐらつかせたり、教会活動をやめさせたりしようとしました。でも、ほとんどの教会員はそんなことに負けはしませんでした。」

「子供たちに福音を教えました」

イジーとオルガには二人の子供がいます。娘のダニエラと息子のペトルです。二人とも幼いときに教会で祝福を

受けました。しかし共産党の支配によって信仰の自由が禁じられていたために、ほかの家族と同様スネデルフレル家族にとっても、自分たちが教会員であることは、実の子供に言うことさえ非常に危険だったのです。しかし二人は道徳的な行いの模範を示し、愛と主の御霊で家の中を満たしました。

スネデルフレル兄弟は子供たちとの関係についてこう話しています。「わたしたちは子供たちに絶えず福音を教えました。家庭の夕べを行い、日曜日には家で日曜学校を開きました。娘も息子もレッスンの中で割り当てを受け、聖典を読んだりしました。」

スネデルフレル姉妹はこう話しています。「我が家の子供たちは、自分たちの親が友達の親とは変わっていることを知っていました。たばこも酒も口にできなかったからです。でも長い間、彼らはほかの教会員と交わることがほとんどありませんでした。そういう状況で、福音の中で子供を育てるというのはなかなか難しいものでした。」

娘が12歳、息子が8歳のころに、イジーとオルガは彼らに教会について話し始めました。スネデルフレル姉妹は「娘は聞こうとしませんでした」と言いました。彼女は神を信じてはいましたが、どの教会の会員にもなろうとしませんでした。彼女は今結婚していて、一人の子供に恵まれています。スネデルフレル兄弟はこう語ります。「彼女にも選択の自由がありますから。でもいつかこの真理を認めるようになると思います。」

息子のペトルは両親の教えを信じ、13歳でバプテスマを受けました。彼は

後に教会員のヤロミーラ・ヘイドゥコバーと結婚し、今は二人の子供に恵まれています。

「正式な認可が出るまで 待っていることはもうできない」

この困難な時代にイジーとオルガは、宗教上の迫害を理由に、外国への移住を許可するように何度も当局に申請しました。しかしその申請は、新たな尋問と迫害の引き金になるだけでした。当時のチェコスロバキアには私企業というものがなく、イジーは公務員として農業と水利関係の調査の仕事をしていました。彼の上司たちが共産党の指導部に呼び出され、イジーに経済的な制裁を加えるように要求したことがありました。そのときのことをイジーはこう話しています。「天のお父様はわたしたちを守ってくださいました。わたしの上司たちは良き友人で、わたしたちに経済的な損失が及ぶことはありませんでした。」

1968年に二人はチェコスロバキアからの国外移住の申請をやめました。「兄弟姉妹から必要とされているのだから、故国にとどまるべきだと思ったのです。彼らを置き去りにすることはできませんでした」とイジーは話しています。

1972年にイジーはチェコスロバキアの管理長老の責任に召され、可能なかぎり教会の活動を再開するようとの要請を受けました。1975年に地方部が設立され、イジーは地方部の部長の責任を受けました。何年もの間、イジーとオルガは夏の休暇の季節になると子

供たちを連れ、国内の各地を旅して回り、教会員の居どころを尋ね当て、彼らを励まし続けました。一人しか見つからないこともよくありましたが、1軒の家に5、6人が集まることもありました。チェコスロバキア以外の国から教会の役員をしている人物が正式にビザを得て入国して来たときは、イジーは彼らに同行して、国内のあちこちを訪ねました。

そのような訪問の間に関わられる「文書の作成は細心の注意を払って行われました。わたしたちは特に決められた約束事に従って手紙を書きました。国内からのものであれ、国外からのものであれわたしのすべての郵便物を検閲していた秘密警察も、中身を理解することはできませんでした。よほどの情報を得ていなければ、手紙の意味の解釈は不可能に近いことでした。」

しかし、イジーが何度も提出していた教会の正式認可の申請は相も変わらず却下され続けていました。やがて彼はこう感じました。「正式な認可が出るまで待っていることはもうできない。自分たちの宗教を公然と実践できるようになるそのときのために教会員を備え始めさせる時はすでに来ている。」

チェコスロバキアの教会の指導者と会員たちにとって、当時は静かではありませんでしたが、とても忙しい時期でした。スネデルフレル兄弟は「わたしたちには怠けている時間はありませんでした」と語っています。当時、教会本部からチェコスロバキアに教会の様々な資料を正式に持ち込むことはできませんでした。そのため彼らは、だれかが

入手した教会の印刷物をほかの人々に広めるために、人目につかないように、うむことのない働きをしたのです。彼らは教会の賛美歌、手引き、テキストなどを翻訳しました。『教義と聖約』や聖典の注解書の翻訳と校閲も終えました。そして地方部大会の話のコピーも作りました。

それから彼らはこれらのすべての資料について、古いタイプライターで一度に9部を複写しました。その写しを受け取った人は、さらに自分で9部を作り、ほかの人に手渡していきました。このようにして、教会の様々な資料があらゆる地域の会員と家族に行き渡るようになりました。

しかし教会員たちは、もし教会の出版物を所持していることが当局に見つかれば厳しい結果を招く危険があるということを片時も忘れませんでした。イジーは話しています。「わたしたちの家も当局の捜査を受けたことがあります。でも彼らは何も見つけ出せませんでした。隠し場所はたくさんありました。」その危険は冒すに足る価値があるものでした。「これらの資料のおかげで教会員たちは偉大な知識をかなり学び、身に付けることができました。それはすばらしい仕事でした。わたしたちはそれによって、再び自由にまた公に礼拝ができるようになるための準備ができたのです。」

「わたしたちは孤立している 思ったことは一度もありません」

チェコスロバキアの聖徒たちは長い間、教会本部や世界の教会員と連絡が

取れず、国内でもほとんど会員同士の接触ができない状況にありました。しかしスネデルフレル兄弟はこう話しています。「わたしたちは孤立していると思ったことは一度もありません。神は天におられます。わたしは、自分たちも全世界の教会員が作る大きな家族の一員なのだといつも思っていました。」

しばらくの間、チェコスロバキアの会員たちは祝福師の祝福を受けるのに、ドイツ民主共和国（旧東ドイツ）へ行っていました。どちらの国も共産党が政権を握っていて、両国間ではある程度行き来が認められていたのです。しかしカルビン・マッコンバー兄弟が1979年にチェコスロバキアを訪ねたとき、彼はイジーに、自分がチェコスロバキアの聖徒たちに祝福師の祝福を授ける権能を与えられたというすばらしいニュースを伝えました。

スネデルフレル兄弟はこう話しています。「その年、わたしはずっと会員が祝福師の祝福を受ける可能性についてあれこれ考えていました。そして秘密警察に知られないように、その件についてマッコンバー兄弟に手紙を書くにはどうしたらよいか祈り求めています。結局、結論として出たのは、彼が来るのを待って、それについて話そうということでした。そしてこの国へ来た彼の口から、彼がわたしたちの祝福師になったということを知らされたのです。義になかった考えは聖霊によって心から心へ伝わります。言葉や文字は要らないのです。」



上——チェコスロバキアの聖徒たちは、1929年に奉獻の祈りをしたジョン・A・ウィットウォー長老を記念して、何十年にもわたり毎年カルルシュテイン城近くのブリースツ・ヒルに登ってきた。1980年7月24日に撮影した写真。下——チェコスロバキア地方部長会、1985-1990年。（左から）ヤロミール・ホルツマン第二副部長、イジー・スネデルフレル部長；ラドバン・チャネク第一副部長。



「わたしたちの霊の目と耳が開かれました」

1975年に、当時中央日曜学校会長をしていたラッセル・M・ネルソン兄弟が、チェコスロバキアの会員に祝福を与えるようにとのスペンサー・W・キンポール大管長からの特命を受けてブラハを訪れました。スネデルフレル姉妹はこのときのことについて次のような話をしています。「今も覚えています。ネルソン兄弟姉妹に神殿に行きたいという気持ちとひょっとしたらこの世ではそれが実現する見込みはないのではないかという気持ちを話したので

す。するとネルソン兄弟が『姉妹、いつかソルトレーク・シティーへ来て、神殿に入れるようになりますよ』とおっしゃいました。とてもあり得ないことのように思えましたが、わたしはその約束をしっかりと胸の中に秘めておきました。」そして4年後、この約束は実現しました。

1979年の春、イジーとオルガはソルトレーク・シティーで開かれる秋の総大会に出席し、神殿の儀式を受けるようにとの招きを大管長会から受けました。彼らは最も近い神殿があるスイスへのビザを申請しても却下されるという経験を長い間していたために、アメリカのユタへの旅行許可はとても無理だろうと考えていました。

ある日、イジーはそのことを職場の友人たちにも話しました。すると同僚の女性が、明日必要な申請書類を持って来るということと、残りの手続きも自分に任せるようにと言ったのです。その数日後、イジーとオルガはアメリカ合衆国への旅行許可証と、アメリカへの入国ビザと航空券を受け取りまし

た。こうして二人は1979年10月、ソルトレーク・シティーで総大会に出席し、その後、神殿でエンダウメントと結び固めを受けました。

イジーはこう言っています。「そうです。奇跡が起こったのですよ。主は許可を得る方法を知っている友人をわたしたちに遣わして、ビザに関する決裁権を持つ人たちの心に働きかけられたのです。大管長会から出された招待状ですから、世の中のどんな力もその計画を止めることはできません。」

スネデルフレル姉妹も「それはほんとうに不思議なことでした。奇跡です」と話しています。

神殿は二人の生活を永遠に変えました。イジーは「突然のように、わたしたちの霊の目と耳がいっぱいに開かれました」と話しています。「わたしたちは『神の奥義』を見、天の御父にもっとよく仕えなければと思いました。そして自分たちは、さらに神殿で奉仕する機会が与えられるようになるという確信を得ました。」

1985年の6月、イジーとオルガはドイツのフライブルク神殿の奉献式に出席するよう地域会長会の招きを受けました。奉献式のあるセッションの中で、ゴードン・B・ヒンクレー大管長が突然スネデルフレル兄弟に話をするように言いました。戸惑いながらも、イジーはその求めにこたえました。彼はチェコ語で話し、その言葉はドイツ語と英語に通訳されました。「フライブルク神殿が東ドイツの兄弟姉妹の偉大な信仰によって建設されたこと、そしてフライブルク神殿が東ヨーロッパの数多くの会員に祝福をもたらすだろうと

いう話をしたのを覚えています。そのときはフライブルク神殿とそこで働く人々の祈りが鉄のカーテンの崩壊を促し、東ヨーロッパの多くの国々から聖徒たちが来られるようになる、などとは考えもしませんでした。」さらに言えば、イジーもオルガも自分たちがその神殿の神殿長夫妻となり、主の家に聖徒たちを迎える働きをするようになるとは思いませんでした。

1985年10月28日に、十二使徒定員会のトーマス・S・モンソン長老が、56人の人を集めて、プラハのスネデルフレル夫妻のアパートで聖徒たちのための大会を開きました。スネデルフレル姉妹は笑いながらこう話しています。「そんなにたくさんの方が入って、アパートの床が抜けてしまうかと思いました。でもほんとうにすばらしい集会でした。」

スネデルフレル兄弟はこう話しています。「モンソン長老はわたしたちのアパートと建物全体をプラハとチェコスロバキアの聖徒の集合地として奉獻されました。非常に霊的な体験でした。出席した全員が神の王国を築き、発展させるための新たな力と献心への決意を得ました。」このとき、モンソン長老はイジーを大祭司に聖任しました。「わたしは聖霊の存在を感じ、心に喜びをもってさらに良い働きをするよう新たに神に命じられた思いがしました。」

**「それを言ったために、
投獄されることも
あり得ると思いました」**

それからの数年間、イジーは教会に

対する正式認可を得るためにさらに熱心に働きました。そしてチェコスロバキアのすべての活発な会員が信仰を一つにし、熱心に断食と祈りをしました。チェコスロバキアの聖徒たちは2年間にわたり、月に2回を断食日曜日としていました。毎月の第1日曜日は世界中の教会員とともに、そして第3日曜日には信仰の自由を求めて断食をしていたのです。

ラッセル・M・ネルソン長老は1987年に共産党政府の宗務管理局を訪れた際に、チェコスロバキアにおける当教会の正式の指導者、つまり政府との正式な連絡担当者はチェコ人でなければならないことを知らされました。ネルソン長老とハンス・B・リンガー長老はイジー・スネデルフレルをその責任に召しました。

もちろん、イジーは喜んでこの責任を引き受けました。彼は以前から長い年月にわたって、何度となく申請を繰り返し、要注意人物、国家の敵と見なされていました。それが今や、当局自身の言明によって、チェコ人である彼が共産党政府に対する教会の正式な代表者となったのです。

ネルソン長老とリンガー長老が同行しているときは、イジーに対する扱ひも丁寧でした。ところが1988年の12月に会合に一人で来るように求められたときは、「管理局の役人たちはその本性をむき出しに」しました。「彼らは教会の正式認可の申請を撤回するように脅迫してきました。もし申請を続けるなら教会員がどういうことになるかという話をして脅してきました。」

このとき、スネデルフレル兄弟は恐



スネデルフレル夫妻はチェコスロバキアの聖徒たちを励まし、支えた幾人かの中央幹部と親しい関係を築いた。上——ゴードン・B・ヒンクレー大管長夫妻とともに、1991年。右上——スネデルフレル家の居間で、トーマス・S・モンソン長老とともに、1985年10月28日。この部屋は長い間、チェコにおける教会本部としての役目を果たした。右下——ラッセル・M・ネルソン長老夫妻とともに、1988年。

れることなく口を開き、過去40年間教会が受けてきた扱いについて激しい怒りをぶつけました。「耐えかねたわたしは、教会の申請をやめさせるには、正式な認可を与えて、公に礼拝を行うのを認めるか、教会員の抹殺、監禁、追放のどちらかしかないと言いました。そのようなことを言ったのだから、すぐに刑務所に入れられてしまうだろうと覚悟しました。ところが驚いたことに、彼らのわたしに対する態度がいきなり悪くなってしまいました。恐らくは、チェコスロバキアの共産党政権下で宗教団体に対する不当な圧迫が行われていることが、教会によって自由世界の中で公にされることを恐れたのでしょう。彼らにどのような理由があったかはともかく、わたしは自分が神に守られていたと確信しています。」

次の年、イジーは危険人物を載せた秘密警察のブラックリストのかなり上位に自分の名前が挙げられていることを知りました。イジーは「いずれにしても、それまでの40年の間に、そんな

ことには慣れ切っていました」と話しています。しかし、毎月秘密警察の尋問を受けながらも、一方では月に1度、宗務管理局との交渉も行っていただけです。彼は頻繁にあるこれらの機会をとらえて「自分たちは絶対に申請を撤回したりはしないことを、彼らの心に焼きつけよう」としました。1989年5月17日に、彼はまた正式認可の申請を出しました。返事がないので、イジーは不服申立書を書き、毎週宗務管理局へ足を運び始めました。

「40年の戦い」の末に

そして、あの忘れられない1989年11月17日がやって来ました。それはチェコスロバキアの共産党政権に対する全国的な「ビロードの革命」が始まった日です。「それはわたしたちの申請に関する向かい風がさらに強くなるという前兆でした。宗務管理局はわたしを文化省へ差し向け、文化省はさらに国務省へとたらい回しにしました。国務

省は閣議による決定がなければどのような決定もできないという主張をしました。ひどい混乱でした。だれも何も知らない、だれも何の責任も取らない、という状況になったのです。やがて秘密警察も宗務管理局もなくなり、共産党政権が崩壊しました。

1990年1月にスネデルフレル兄弟は教会の認可申請書を新しい政府の文化省長官あてに提出しました。教会、宗教団体の登録は文化省の管轄下にありました。イジーの説明を聞き、申請書を読んだ文化省長官はすぐに「『政府は速やかに教会を正式に認可し、公の活動を認可すべきである』という推薦書を書いてくれました。さらに長官は、新しい政府には、『不法にその活動の自由を奪ってきた』共産党政権が教会に及ぼした不正を廃除する道義的責任があると書きました。」

1990年2月6日、ラッセル・M・ネルソン長老、ハンス・B・リンガー長老、スネデルフレル兄弟は新政府の副議長と会談し、その日の午後にはカルルシ

ユテイン城近くのブリースツ・ヒルにジョン・A・ウィットナー長老の足跡を訪ね、回復された福音の伝道の地としてチェコスロバキアを再び奉献しました。

1990年2月21日、チェコスロバキアの新政府は教会の申請を1990年3月1日付けをもって認可するという決議をしました。このニュースは新聞、ラジオ、テレビを通して全国に伝えられました。スネデルフレル兄弟はこう言っています。「チェコスロバキアにおける教会の正式な認可と公の活動の自由を求めた40年にわたる戦いが、ついに終わったのです。」

その年の暮れ、ゴードン・B・ヒンクレー大管長はチェコスロバキアを訪れ、聖徒たちと特別な集会を持ちました。「それはわたしたちにとって、まさしく霊のごちそうでした。後に出席者全員が、聖霊の存在を強く感じたと証しています。ほんとうに一生の思い出になっています。」

「神殿にいるのは、 ほんとうにすばらしいことです」

スネデルフレル兄弟はもう一つの忘れられない思い出を話してくれました。1991年5月20日に彼の家の電話が鳴りました。電話をかけてきたのはトーマス・S・モンソン副管長でした。モンソン副管長はこう言いました。「イジー、あなたはフライブルク神殿の神殿長に召されました。今年の9月1日から、この責任に就いていただきます。ついてはご返事をおうかがいしたいのですが。」最初は驚きのあまり、

何も言うことができませんでした。するとモンソン副管長が「イジー、聞かれていますか」と尋ねてきました。わたしはモンソン副管長に答えました。「慎んでその召しをお受けします。」

スネデルフレル夫妻は神殿で、福音を聞く機会に一度も恵まれなかった幾世代もの死者のために獄の扉を開きました。また彼らは、信仰の自由を奪われ、この世の霊的な闇の中で痛めつけられた人々のためにも神殿の扉を開けています。彼らは、ロシア、ウクライナ、ベラルーシ、クロアチア、ポーランド、ハンガリー、チェコ共和国、スロバキア共和国、ドイツ民主共和国など旧共産圏諸国からの教会員たちを歓迎しています。

「神殿にいるのは、ほんとうにすばらしいです」とスネデルフレル姉妹は簡潔に言います。神殿で忠実に4年間務めを果たし、スネデルフレル夫妻は今プラハの自宅に戻り、自分たちの先祖のもっと多くの人々が神殿の祝福にあずかれるように家族歴史の探求を続けています。

「教会員はだれでも英雄です」

「わたしの霊の目には、この国に神の業を回復するために働いたすべての人々の顔が見えます。」スネデルフレル兄弟はこう話しながら、数多くの宣教師、伝道部長、各地の聖徒、現在と昔の中央幹部の名前を挙げました。

彼はそれらの人々の名前、顔、出来事を思い浮かべながら、彼自身は英雄と呼ばれるに値するのではないかとこの問いかけに、再び頭を横に振り、こ

う言いました。「それどころか、わたしは自分にはもっとなすべきことがあったと思います。しかし、もしわたしが英雄ということになるなら、教会員はだれでも英雄ですよ。わたしたちは皆、絶えず高まり続けるこの世の様々な危険と直面して生きていかなければなりません。教会に英雄は必要ないと思います。必要なのは喜んで神の業に仕える人、回復された福音の原則に忠実に従う人、神の王国を築くために熱心に働く人、心を尽くし、思いを尽くして救い主であるイエス・キリストに堅くつく人です。」□

(この記事は著者がスネデルフレル夫妻から直接聞き書きしたことで、イジー・スネデルフレルの個人の記録〔未刊〕からの抜粋を基に構成したものです。)

プラハの自宅で、1985年。



預言の賜物^{たまもの}

「わたしたちは……預言……の賜物があることを信じる。」(信仰箇条1:7)

福音の回復に伴い、預言の賜物が再び授けられるようになりました。ハロルド・B・リー大管長はこの賜物を、「神に姿を現していただく賜物」(*Stand Ye in Holy Places*『聖なる場所に立ちなさい』155)と説明しています。この賜物により、生ける預言者が神の子供たちへの御心を伝えることができます。そしてわたしたちは、自分自身のために啓示を受けることができます。

「何であろうと聖霊に感じて語ることは……主の心……となる」

いつの時代にあっても、預言者たちは靈感を受けて、将来の出来事を預言してきました。しかし、預言者の務めは前もって語り、真の教義を教え、救い主の証人として行動し、罪に対して警告を發し、主の民を御霊の力によって導くことでした。こういう意味で、わたしたちが預言者として支持する指導者は、靈感を受けた義になつた教師なのです。

預言者は「奉仕のわざ」(エペソ4:12)にとつてなくてはならない存在であると、主は教えておられます。「何であろうと聖霊に感じて語ることは、聖文となり、主の心となり……救いを得させる神の力となる」(教義と聖約68:4)と断言されています。教会の大管長は世界中の人々にとつても主の預言者、聖見者、啓示者です。大管長がその務めを果たすのを助ける使徒もまた、預言者、聖見者、啓示者として

聖任された者です。

「イエスのあかしは、
すなわち預言の霊である」

預言の賜物は教会の指導者にのみ与えられているものではないことを、わたしたちはモーセの言葉から知ることができます。モーセはこのように叫びました。「主の民がみな預言者となり、主がその霊を彼らに与えられることは、願わしいことだ。」(民数11:29)また、ヨハネは「イエスのあかしは、すなわち預言の霊である」(黙示19:10)と述べています。このすばらしい賜物を通して、わたしたちは救い主が生きておいでになり、わたしたちを愛していらっしゃる、知ることができるのです。

またそれは、わたしたちが行う選択が正しい選択であると知る賜物でもあります。聖霊の賜物を受ける人は「与えられた権威と責任の範囲内で」啓示を受けることができます(『聖なる場所に立ちなさい』155)。親は子供たちを導くうえで啓示を受けることができます。訪問教師は、教える姉妹を助け

るために必要な促しを受けることができます。わたしたちは皆、日常生活の中で靈感を受けることができます。

ある姉妹は、監督から突然、伝道に出ることについて考えてみるように言われて、困ってしまいました。24歳で大学を卒業した彼女は、別の大学から大学院の奨学金の申し出を受けていました。姉妹たちが専任宣教師として伝道に出る通常の年齢を過ぎていましたし、続けて教育を受けたいと望んでいたのです。

しかし、どうすべきか考えていると、主は奉仕をするように望まれているという気持ちがだんだん強くなってきました。監督から助言を受けた後、ステーク会長からも助言を受けることにしました。ステーク会長との面接は、心の中で尾を引いていた不安を取り去ってくれました。ほかの人は別の答えを受けたかもしれませんが、これは自分に与えられた答えであると感じました。こうして彼女は、専任宣教師として伝道へ出たいという意思を表明しました。

彼女は当時に振り返ってこのように述べています。「そのときわたしは、もし今死んだら、救い主にお会いして主の承認を受けられるだろうと確信し、胸がいっぱいになりました。主がわたしにするように望まれることを行おうとしていたからです。祝福として主から受けたあのときの平安と安心を忘れたことはありません。」

●神はどのような方法で、御心をわたしたちに表されますか。

●預言の霊は、神の御心に従って生活するうえで、どのような助けとなりますか。□



天でもつながれ、あなたが地上で解くことは天でも解かれるであろう。』(マタイ16:19) この鍵こそ、神権の永遠の鍵であって、ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、そして、モーセ、エライアス、エリヤの手によって回復されたものなのです。これが、教義と聖約第124章で主が言われたとおりの、完全な神権の鍵です。その鍵は、現在、主の宮の中で行使されています。』⁵

最初の示現

「この〔ニューヨーク州北部の〕地方こそ、最初の示現と呼ばれる出来事が起きた場所です。それは、わたしたちの教会歴史の起点とも言うべき出来事です。神聖な権能に関してわたしたちが述べる主張も、この御業の正当性に関してわたしたちが告げる真理も、その根源は皆、少年預言者のこの最初の示現にあります。この出来事が、時満ちる神権時代の大きな幕開けとなりました。神がこの時、それまでに存在したすべての神権時代の、いわば、一つの頂点として、あらゆる力と賜物、祝福を回復すると約束されたのでした。その出来事が起こったのが、わたしたちが今いるこの地方なのです。愛する兄弟姉妹の皆さん、繰り返し申し上げます。最初の示現こそ、教会の大義を果たすためのかなめとなっている出来事なのです。』⁶

『モルモン書』

「『モルモン書』が真実であることを否定できる人がいるでしょうか。それはだれでも手の届くところにあります。その教えが真理であるかどうかを知るためには、それを読むこと、しかも、祈りの気持ちで読むことです。だれでも、モロナイの言葉に従って、それが真理であると知ることができます。数百万という人々が、この書物を読むことによって、それを知ってきました。どうぞ、この書物に触れ、手に取り、開き、そこに書かれている言葉についてよく考えてみてください。この書物の起源がほかにあることを証明しようとして、幾多の説明が行われてきました。しかし、だれ一人としてその証明に成功した者はいません。

『モルモン書』は時代を超えて真理であり続けているのです。』⁷

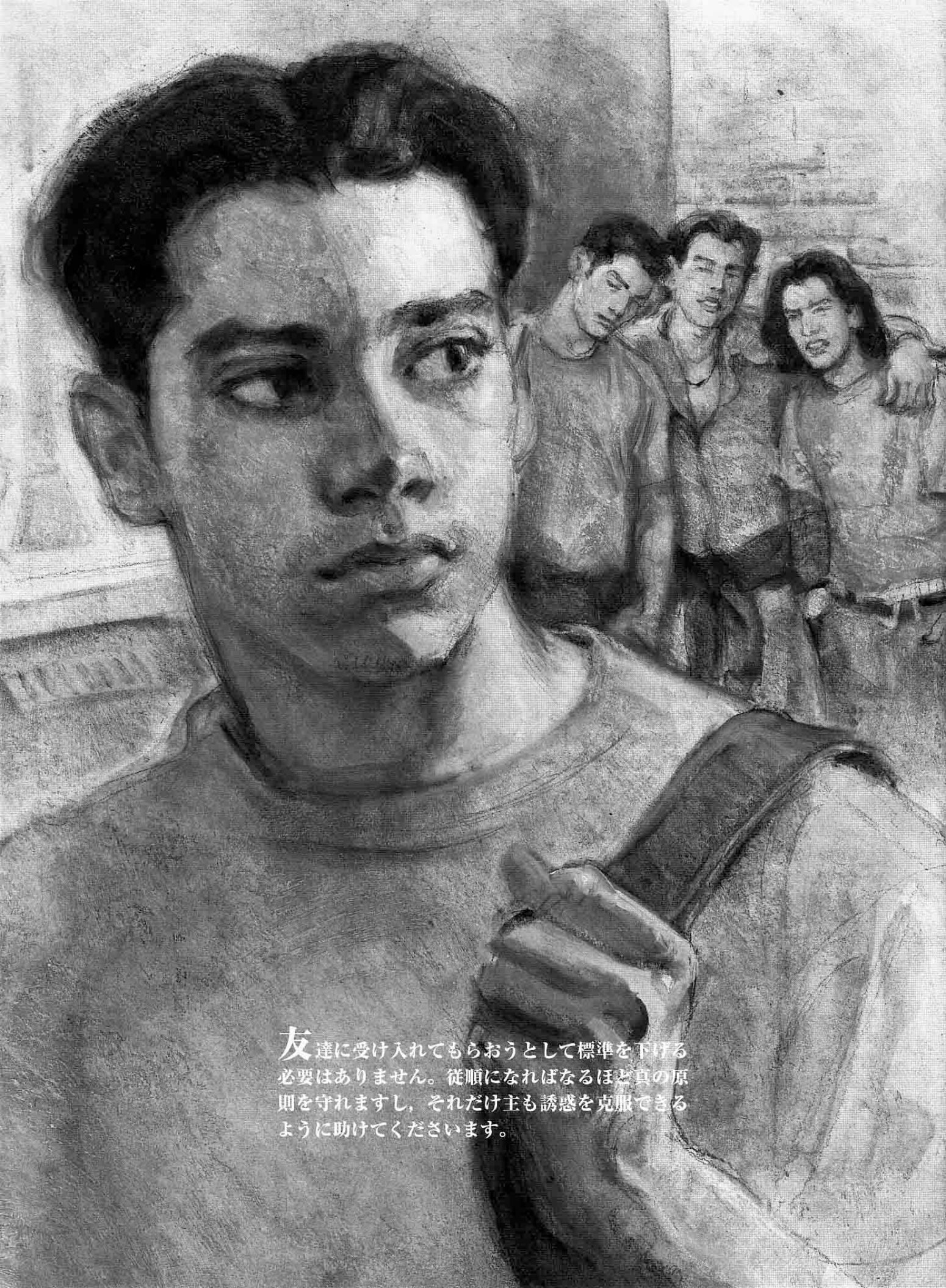
教会のために犠牲を払うこと

「わたしは、この御業のために人々がどれほどの犠牲を払ってきたのか、ということについて考えています。4,000人以上の人々が、ミシシッピ川とソルトレイク盆地の間で亡くなり、埋葬されました。この大義のために、命を失ったのです。繰り返し申し上げます。偽りの物語のためにあれだけの犠牲を払う人々は存在しません。』⁸□

注

1. 1996年6月13日、オランダ、ハーグでのファイヤサイド
2. 1996年6月15日、ドイツ、ベルリンでの地区大会
3. 1996年6月15日、ドイツ、ベルリンでの地区大会
4. 1996年6月14日、デンマーク、コペンハーゲンでのファイヤサイド
5. 1996年6月14日、デンマーク、コペンハーゲンでの宣教師集会
6. 1996年7月12日、ニューヨーク州ロチェスターでの宣教師集会
7. 1996年7月12日、ニューヨーク州ロチェスターでの宣教師集会
8. 1996年7月12日、ニューヨーク州ロチェスターでの宣教師集会





友達に受け入れてもらおうとして標準を下げる必要はありません。従順になればなるほど真の原則を守れますし、それだけ主も誘惑を克服できるように助けてくださいます。

真剣に考えるべき事柄

十二使徒定員会会員
リチャード・G・スコット

皆さんの中には該当年齢に達したら宣教師になろうと心待ちにしている人がいるでしょう。また、もうすぐ出る人もいるでしょう。しかし一方で、別の選択をしているためにこうしたふさわしい目標に到達し得ない人がいることを、わたしは真剣に心配しています。

個人面接のように、皆さんとわたしと二人だけで、ほかにはだれも聞いていないつもりで話します。わたしの目的は、皆さんが正しい選択をするすべを身に付けられるよう助けることです。そうすれば皆さんは、確固とした自尊心もはぐくめるでしょう。また、自信をもって正しい行いができ、よくない仲間からのプレッシャーや、周囲の悪影響を克服できるでしょう。

子供のころ、ほかの子たちが学校で生殖器について話しているのを聞いて、悪いことだと思いました。でも、なぜ悪いのかははっきり分かりませんでした。皆さんも同じように感じたことがあるかもしれません。読者である皆さんの方からは何も質問ができませんので、世界中の若人がそっと聞いてくる質問の中から最も多いものを採り上げて話を進めましょう。

各質問には、聖文と預言者の言葉から学んだことに基づいて答えます。選択するときのはっきりとした基準を皆さんに持ってもらうためです。「これは真実である」と、皆さんが聖霊の力を通して感じられるように願っています。話を聞きながら、自分にどう当てはまるか考えてみてください。そうすれば自分の生活にどう取り入れるべきかも分かってくるはずです。

質問——よくない仲間からのプレッシャーに対抗する方法を教えてください。なぜある人たちは悪いことをして、それを楽しかったと言って自慢して回るのですか。

仲間に入らないと、何だか自分だけばかを見ているような気がします。

答え——わたしたちは、サタンに打ち勝って初めて神に喜んでいただけます。悪いことをしようとする人からあなたがプレッシャーを受けるのはそのためです。彼らがあなただけを仲間に入れようとするのは、ほかの人も同じことをやればそれだけ安心するからです。あなたを利用しようとしているのかもしれませんが。仲間から受け入れられたい、一緒にいたいと思うのは自然なことです。ギャングに加わる人がいるのもそういう気持ちからですが、その代わり自由がなくなってしまいます。命まで失う人もいます。本人はなかなか自覚できないかもしれませんが、あなたはすでに強い人間になっていて、ほかの人も口には出さないだけであなたを尊敬しています。わたしたちも心からあなたを信頼しています。友達に受け入れてもらおうとして標準を下げる必要はありません。従順になればなるほど真の原則を守れますし、それだけ主も誘惑を克服できるように助けてくださいます。¹ さらに、あなたの強さを感じることで、周りの人にとっての励みにもなります。常に標準を守ること、自分の規範を人々に知ってもらうのです。標準について聞かれたら、答えてあげてください。ただし説教調にならないよう心がけましょう。個人的な経験から言うと、この方法は効果があります。

自ら進んで重大な過ちを犯そうとする人はいません。皆から受け入れられようとして標準を下げるから過ちに陥ってしまうのです。強い人間になってください。仲間を導く側になってください。良い友達を選んで一緒にプレッシャーをはねのけてください。

質問—悪い考えが入り込むのをどう防いだらいいでしょうか。入って来たときはどうしたらいいですか。

答え—悪い考えにはわたしたちの意志とは無関係に入ってくるものと、わたしたちが見たり聞いたりして招いてしまうものがあります。² みだらな写真を見たり、そうしたものについて話したりしていると強い衝動が起きます。するとふさわしくないビデオや映画を見るように誘惑されます。こういったものにあなたは取り巻かれています、決して手をつけないでください。好ましい事柄について考え、いつも思いを清く保ってください。³ わたしたちの頭は一度に一つのことしか考えられないようにできています。この特性を生かして、よい思いで悪い思いを押しつけてしまいましょう。⁴ とにかく、よくないものを見たり読んだりして、悪い思いを助長しないことです。思いをコントロールしないかぎり、サタンはあなたを誘惑し続け、思いから行いへと駆り立てようとします。⁵

質問—純潔の律法はなぜそんなに大切なのですか。なぜ結婚前に性的な関係を持つてはいけないのですか。

答え—偉大な幸福の計画の基本、そして救い主の教えの中心は家族です。新たな家族は、男女が神聖な結婚の聖約を交わし、合法的に一つに結ばれて夫婦となり、父母となる時に始まります。家族のこの理想的な始まりは、神殿で結び固めを受けてこそもたらされます。結婚によって、夫婦は互いに完全な忠誠を尽くすこと、子供を家庭に迎え入れ、全力を尽くして育て、教えることを約束します。父親は生活の糧を与え家族を守る役割を、母親は思いやりと愛、養いによって家族に心の安らぎを与える役割を果たします。二人は協力し合いながら、祈りや従順、愛、奉仕、知識の探求などの原則を、自分自身と子供たちの心の中にはぐくんでいきます。

主はこの永遠に続く結婚という聖約の中で、夫婦が主の定められた範囲において、その愛と美しさを保ちながら神聖な創造の力を用いることを

許されました。⁶ この個人的で神聖で親密な経験の一つの目的は、天の御父が現世での経験をさせるために地上に送ろうとしておられる霊に肉体を与えることです。この力強く美しい愛の感情が与えられているもう一つの理由は、夫と妻が互いに対して誠実で忠実な心、思いやりを持ち、目的を一つにすることにあります。

しかし、この親しい行為を結婚という永遠の約束とは掛け離れた状況で行うことは主が禁じておられます。それは、主の計画を台なしにしてしまうからです。⁷ 神聖な結婚の聖約の中では、この関係は主の計画にかなった行為となります。しかし、ほかの方法によるのは主の御心に反していますし、情緒的にも霊的にも大きな害を受けることになります。過ちを犯した人は、当初は気づかなくても後で必ずその害を被るのです。性的な不道徳があると、聖霊の力が遮られて、わたしたちを高め、啓

発し、力づける作用は失われてしまいます。また性的な不道徳は強力な肉体的、情緒的興奮を引き起こすため、人々は情欲を抑え切れなくなり、もっと重大な罪に陥ってしまいます。やがて自分のことしか考えられなくなって、野蛮な行為や墮胎、性的虐待、暴力犯罪などへと発展していきます。性的な欲望の高まりが同性愛に発展することもあります。これは邪悪な罪であり、絶対に間違っています。⁸

性的な罪は若い男性が授かっている神権を汚します。また若い男性、若い女性のどちらにとっても、そのような罪は霊的な力を徐々にむしばんでいくものであり、またイエス・キリストへの信仰を覆し、主に仕える力を阻んでしまうものでもあります。しかし、たゆまず、喜んで主に従うなら、自信と力はさらに増します。難しい問題にぶつかっても克服できる人格が養われます。そして主から靈感と力を受けられるようになります。⁹

質問—性的な罪にかかわってはいけない、とよく言われますが、それがどこまでのことを指すのか分かりま



好ましい事柄について考え、いつも思いを清く保ってください。

せん。はっきりと教えてください。

答え——結婚というきずなで結ばれていない男女の間で行われるすべての性的接触を指します。つまり衣服の上からであっても意図的に相手の体の神聖な部位に触れることは罪であり、神から禁じられています。また自分自身の体を用いて意図的に情欲をかき立てることも罪です。¹⁰ サタンが人に信じ込ませようとしていざなっている考えがあります。それは、感情の高まりを求める二人が同意のうえで言う肉体的な接触には許容範囲があり、それさえ守っていれば何の害もないというものです。わたしはイエス・キリストの証人として、その考えは明らかに間違いであると証します。サタンは特に、これまで清い生活を送ってきた人に、強い影響力を、雑誌やビデオ、映画などで試させようとしています。情欲をかき立てて試させ、性的な関係に陥らせ、汚れさせようとするのです。やがて頑固な習慣が根づいてしまい、なかなか打ち壊せなくなります。結果として、情緒的精神的な傷跡が残ります。

あなたも大人になって、結婚について真剣に考えるようになったら、気持ちの表現の仕方を、そばに両親がいたとしても恥ずかしくない程度までに抑えておいてください。¹¹ 戒めに従うという聖約を主と交わすなら、神聖な戒めを守る助けとなるでしょう。何をして何をしないかを前もって決めておきましょう。そして、誘惑を受けてもその標準を変えないことです。状況から例外が認められると思えるときでもその標準を捨ててはいけません。神の律法も時には当てはまらないことがあると思わせるのは、サタンのあなたを傷つける一つの手段です。神の律法に例外などありません。

質問——結婚前に好きな相手とどこまでいったら罪になりますか。

答え——結婚前には、ガールフレンドであろうと婚約者であろうと、だれであろうと性的な接触を持つてはいけません。それが唯一の答えです。¹² これは戒めであると同時に、あなた

の幸福のために設けられた標準でもあるのです。若いときには、グループデートをするよう教会が勧めるのはそのためです。結婚について真剣に考える年齢になったら、真実の愛は相手を高め、守り、敬い、豊かにするということをいつも心に留めてください。真実の愛は、好きな女の子や男の子のために犠牲を払おうという気持ちをもたらします。これに対しサタンは、愛について間違った考えを吹き込もうとします。しかし、そのような愛は情欲にほかならないのです。それは欲望を満たそうとする気持ちから生じます。主が定められた限界を越えないよう感情を抑え、愛する人を守ってください。あなたはどうすれば清さを保てるか知っているはずですが。皆さんがそのような生活を送ってくれるものと信じています。

質問——もし性的な罪を犯したら、どうしたら悔い改められますか。監督に告白する必要があるのはどのような罪ですか。

答え——今まで話してきた性的な罪には、すべて監督を交えた真剣な悔い改めが必要です。あなたがすでに罪を犯してしまっているのなら、今、悔い改めてください。主の戒めを破ることは悪いことですが、破っているのに何もしないのはもっと悪いことです。罪は肉体をむしばむ癌のようなものです。ほうっておいたら決して治りません。悔い改めて治さないと、悪くなる一方です。両親も力になってくれます。そして、監督の指示に従って悔い改めることで清くなれます。監督は忙しそうでなかなか時間を割いてもらえない、と感じるかもしれませんが、でも、困っていて助けが必要だと言えば聞いてくれるはずですが。

ある重大な問題を抱えた若人はこう言っています。「ぼくは悪いと分かっていることをやってきました。何が悪いことか、物心つくころから教えられてきたのにです。悔い改めは偉大な賜物であり、それがなかったらぼくらは救われないことは知っています。でも今は悔い改める準備ができていません。準備ができれば悔い



結婚について真剣に考える年齢になったら、真実の愛は相手を高め、守り、敬い、豊かにするというをいつも心に留めてください。

改めます。」何と嘆かわしい態度でしょうか。今は故意に重大な罪を犯しながら悔い改めを先に延ばすこと、これは恐ろしい間違いです。絶対にそんなふうには考えないでください。¹³ 故意に罪を犯している人の多くは、悔い改めができなくなっています。また、計画的な罪に対する罰は重く、克服は困難です。罪に気づいたら、今、悔い改めてください。悔い改められる間にです。

ここまで読み進め、あなたはもっとふさわしくなりたいという気持ちになったのでしょうか。それがわたしの心からの願いなのです。¹⁴ あなたには神聖な責任があり、真理を学び、真理に従い生活する¹⁵ 特権も有しています。¹⁶ 聖典、とりわけ『モルモン書』を研究するとき、義にかなった生活をしようという決意は強められます。また、両親や指導者の話、そして預言者の言葉に耳を傾けましょ

う。救い主に信仰を持ちましょう。きっとあなたを助けてくださいます。¹⁷ 主はこう言われました。「あなたがたがわたしの言うことを行うとき、主なるわたしはそれに対して義務を負う。しかし、あなたがたがわたしの言うことを行わないとき、あなたがたは何の約束も受けません。』¹⁸

道徳的に清くあってください。あなたが全力で自分の分を果たせば、主はそうできるようにしてくださいます。¹⁹ 主は生きておられ、あなたを愛していらっしゃいます。主はあなたが自分の分を果たすなら、必ず助けてくださいます。□

この記事は、1994年10月総大会の説教を基に書かれました。



義にかなった生活をしようという決意は強められます。……両親も力になってくれます。

注

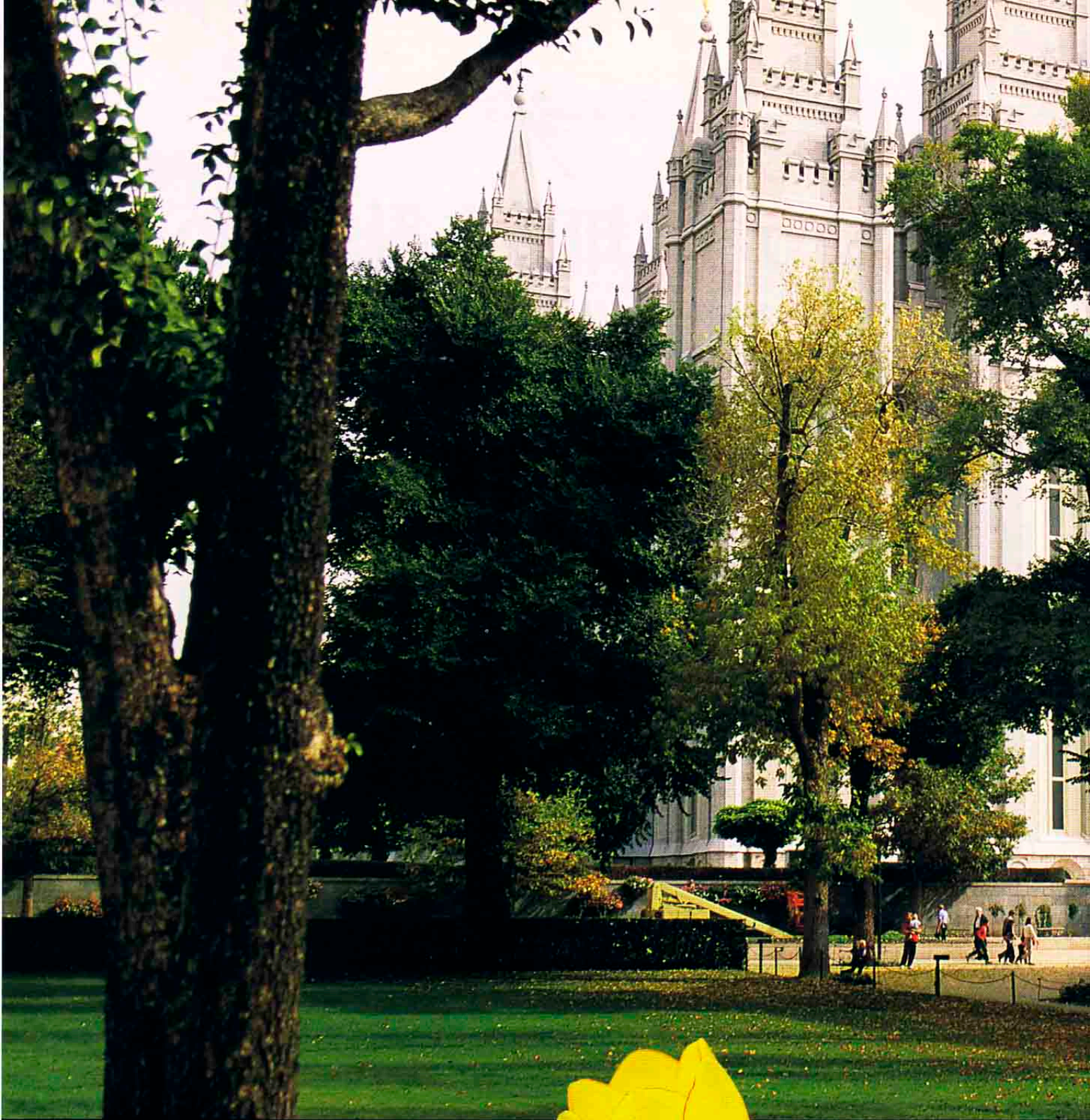
1. 1コリント10：13参照
2. H・バーク・ピーターソン『聖徒の道』1994年1月号、50-52参照
3. *The Teachings of Ezra Taft Benson* 『エズラ・タフト・ベンソンの教え』278、445-446参照
4. ボイド・K・バッカー、*Ensign* 『エンサイン』1974年1月号、27-28参照
5. トーマス・S・モンソン『聖徒の道』1991年1月号、52-53参照。ロバート・L・シンプソン『エンサイン』1973年1月号、112も参照
6. スペンサー・W・キンボール、*Conference Report* 『大会報告1973-75』154参照
7. ボイド・K・バッカー『エンサイン』1972年7月号、111-113参照
8. スペンサー・W・キンボール『聖徒の道』1981年4月号、183-184参照
9. 教義と聖約43：9、15-16参照
10. スペンサー・W・キンボール『大会報告1973-75』240；『聖徒の道』1978年2月号、6；『聖徒の道』1981年4月号、183参照
11. 『エズラ・タフト・ベンソンの教え』283-284参照
12. *The Teachings of Spencer W. Kimball* 『スペンサー・W・キンボールの教え』エドワード・L・キンボール編、65、176-177参照
13. 『エズラ・タフト・ベンソンの教え』70-72
14. 教義と聖約64：33-34参照
15. 教義と聖約84：35-39参照。スペンサー・W・キンボール『救しの奇跡』133-134も参照
16. 『スペンサー・W・キンボールの教え』494参照
17. モロナイ10：32参照
18. 教義と聖約82：10
19. 3ニーファイ18：20参照

若いうちに知恵を得なさい



CHRIST IN THE TEMPLE, BY HEINRICH HOFMANN; COURTESY OF C. HARRISON CONROY COMPANY

イエスは、真理を知りたいと願った古代の人々に教えを説かれたように、^{こんにち}今日も、永遠の真理を探究する人々の導き手となってくださいます（アルマ37：35-37；38：9参照）。



テンプル スクウェア





18 47年7月に開拓者がソルト
レーク盆地に入植した4日後、
ブリガム・ヤング大管長はソルトレー
ク神殿の敷地を選定しました。そのう
ちの4ヘクタールはテンプルスクウェ
アとなり、ソルトレーク・シティーだ
けでなく教会の中核地になりました。
今日のテンプルスクウェアは、何百

万人もの訪問者に、見たり訪れたりで
きる場所を豊富に提供しています。手
入れの行き届いた花壇、樹木、かん木
は、ソルトレーク神殿、タバナクル、
アッセンブリーホール、2か所の訪問
者センター、教会に関連する多くの記
念碑と銅像に美しさを添えています。
訪問者は、テンプルスクウェアの周り

左ページ——約3万本のオランダチュ
ーリップの球根が植えられ、春の花壇
を彩っている。モンゴル出身のマグサ
リン・バチメグ姉妹がイエス・キリス
トについて証あかしをしている。上——ソル
トレーク神殿とタバナクル。

をゆっくりと散策するか、専任の姉妹宣教師から教会歴史と信条について学ぶかを選択できます。

美しいテンプルスクウェアの西側には家族歴史図書館と教会歴史美術館があります。東側は、ジョセフ・スミス記念館、扶助協会ビル、教会執務ビル、教会本部ビル、歴史に名立たるブリガム・ヤングの家、ライオンハウスとビーハイブハウスの隣接する広場となっています。

今日の建築物との比較で特筆すべきことは、テンプルスクウェアに最初に建築された建物が、木の枝で屋根をふいた、あずまやであったことです。この建物は、集まった聖徒たちに日陰を提供しました。その後の教会員の増加に伴って、建物の数も規模も大きくな

っていきました。そのような絶え間ない成長に合わせ、ゴードン・B・ヒンクレー大管長は、1996年4月の年次総大会でテンプルスクウェアのすぐ北の敷地に「より大きな規模の礼拝施設」が建設されることを発表しました。「奉獻された礼拝用の建物」であるこの施設は、総大会やそのほかのふさわしい活動に集う大勢の人々を収容することでしょう。

まだソルトレーク・シティーを訪れたことがない多くの『聖徒の道』読者の皆さんのために、テンプルスクウェアとその関連施設を写真とともにご紹介しましょう。□

(写真/表記されていないものは、すべてクレグ・ダイヤモンド撮影。)



春 庭園は「人を神に導く」ように設計されていると、教会造園責任者のピーター・ラシグ兄弟は言います。上—アッセンブリーホール。右—カナダ、プリティッシュコロンビア州のジェニファー・ユーン・ロング姉妹。夕暮れどきの神殿。









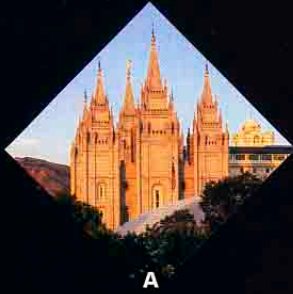
夏

左ページ、左上から——教会執務ビルの円柱。テンプルスクウェアの門の拡大写真。300種類の花が毎年植えられる。左ページ、右——タバナクル外側の馬ぐりの木。上——教会本部ビルの南側。右——アロン神権回復記念碑の拡大写真。テンプルスクウェアの訪問者たち。右下——ハンガリー出身のイレヌ・ベンクザ姉妹。左下——アメリカ合衆国、バ



ーモント州出身のシェリー・L・ブロードマン姉妹。





PHOTOGRAPH BY BRANT LIVINGSTON

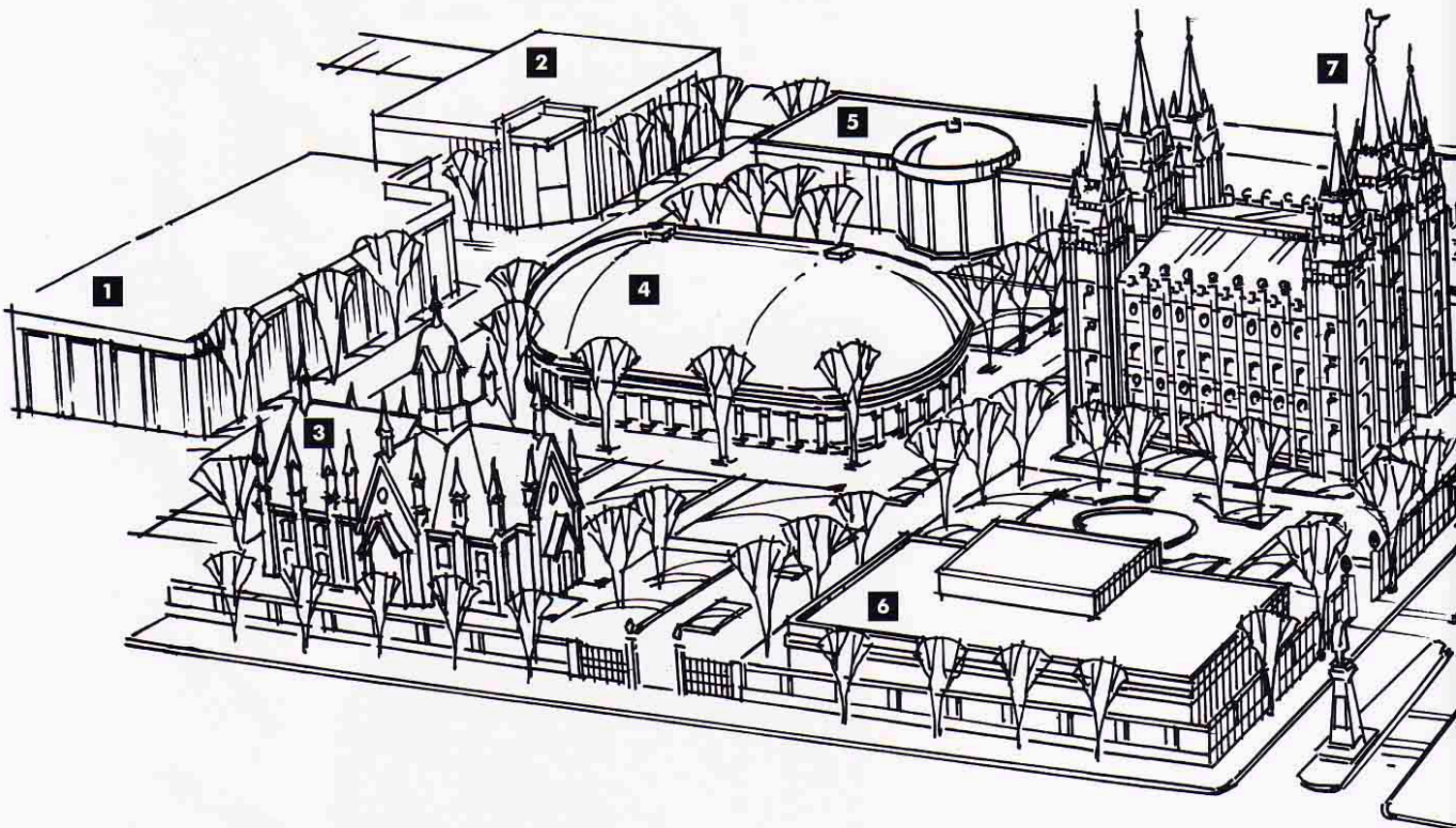


PHOTOGRAPH BY BRANT LIVINGSTON

テンプルスクウェア

散策ツアーガイド

- | | | |
|-----------------|------------------|--------------|
| 1. 家族歴史図書館 | 6. 訪問者センター南館 | 11. 教会執務ビル |
| 2. 教会歴史美術館 | 7. ソルトレーク神殿と神殿別館 | 12. ライオンハウス |
| 3. アッセンブリーホール | 8. ジョセフ・スミス記念館 | 13. ビーハイブハウス |
| 4. ソルトレーク・タバナクル | 9. 扶助協会ビル | |
| 5. 訪問者センター北館 | 10. 教会本部ビル | |





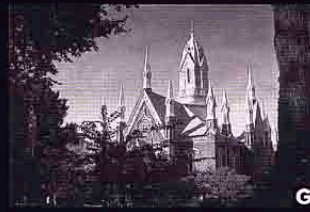
PHOTOGRAPH BY TAMRA HAMBLIN



PHOTOGRAPH BY BRANT LIVINGSTON

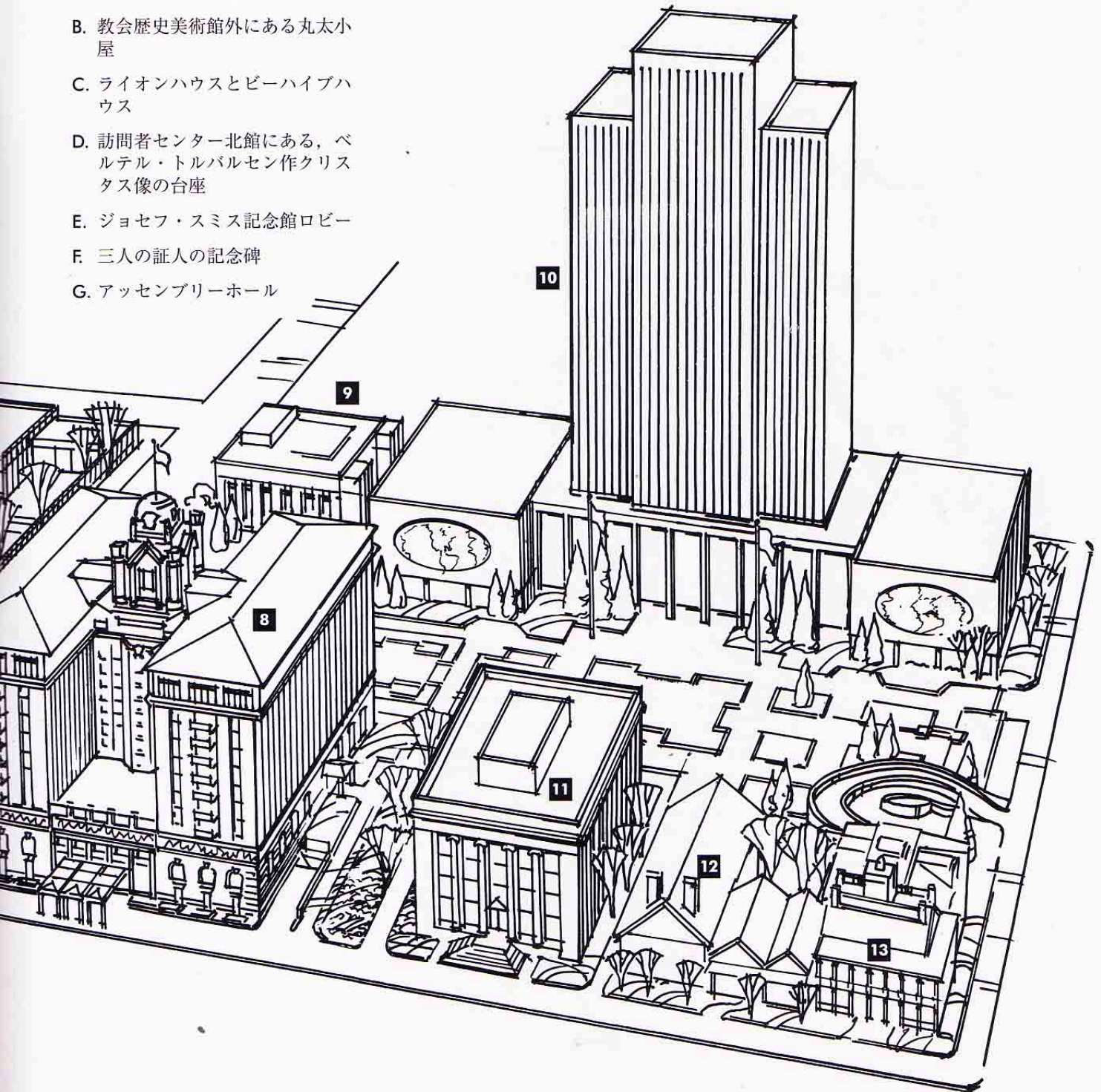


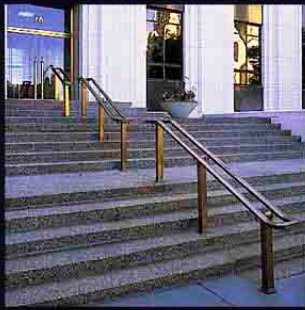
PHOTOGRAPH BY WELDEN ANDERSEN



PHOTOGRAPH BY WELDEN ANDERSEN

- A. ソルトレーク神殿
- B. 教会歴史美術館外にある丸太小屋
- C. ライオンハウスとビーハイブハウス
- D. 訪問者センター北館にある、ベルテル・トルバルセン作 Kristus 像の台座
- E. ジョセフ・スミス記念館ロビー
- F. 三人の証人の記念碑
- G. アッセンブリーホール





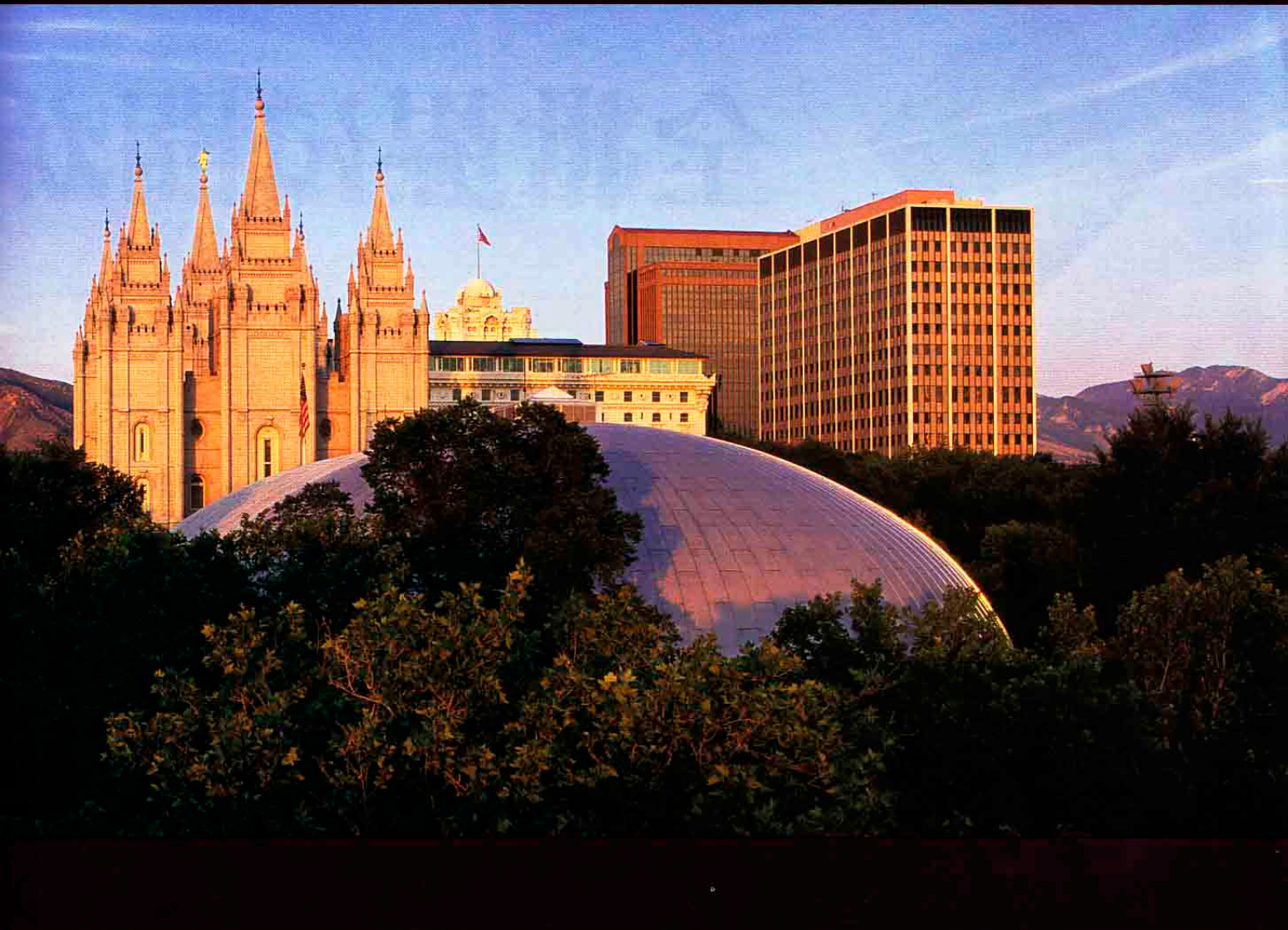
秋

左上から——紅葉。扶助協会ビルの玄関。フランス出身のナジェ・ラウ一姉妹。上——左から教会本部ビル、ソルトレーク神殿、ドーム型のタバナクルの向こうに見えるのはジョセフ・スミス記念館の頂部、2棟の商業ビル。下——かもめの記念碑。

冬

下——訪れる人々は霜の降りた枝を見て、暑かった夏を懐かしむ。右ページ、左——ソルトレーク神殿の冬景色。右——訪問者センター南館を背景にしたかもめの記念碑台座。月が輝く冬の日の出。霜が降りた枝々に反射する日光。







全世界に開か

ソルトレーク・テンプルスクウェア伝道部の担当区域はソルトレーク・シティーの市街地のわずか数ブロックにすぎません。しかし年間に500万人の訪問者を迎えるこの伝道部は教会で最も国際色の強い伝道部の一つです。

マリアン・マーティンデイル、
ジェニファー・ガント・アブシャー

順注^{ソル}朴^{ジュバク}姉妹は16歳のときに、韓国のソウルでバプテスマを受けました。そして21歳のときに、祈りに祈りを重ねた末に、天の御父が自分に専任宣教師として働くように望んでおられることを知りました。彼女はその件について監督と話し合

い、面接を受け、準備を始めました。しかし教会員でない彼女の両親は、娘のその決意を聞いて喜びませんでした。特に父親の落胆は大きいものでした。やがてソルトレーク・テンプルスクウェア伝道部で奉仕するようとの召しを受け、彼女は主を信頼し、ユタ州プロボの宣教師訓練センターへ向かうために飛行機に乗りました。

朴姉妹は飛行機の中で父親に手紙を書きました。これから18か月間どこで働くかを伝え、宣教師として働くことが、自分にとってどれほど大切なことを分かってもらおうとしました。しばらくしてから、彼女は父親からの手紙を受け取りました。その中には、彼が娘を愛しており、娘の伝道への思いを理解したことが書かれていました。

テンプルスクウェアは順注朴姉妹と父親を和解させました。ユタ州ソルトレーク・シティーのテンプルスクウェアには世界中から観光客が来て、救い主とその教会についての知識を得ています。毎年500万以上の人々がテンプルスクウェアを訪れ、約200人の宣教師たちがその訪問者たちを迎え、ガイドしています。

この伝道部のユニークさは、専任で働く長老がいないということです。テンプルスクウェアには、自宅から通って教会に奉仕している夫婦宣教師たちがいるので、年輩の長老たちが何人かいることになります。しかし、その人たちも専任の長老ではありません。専任宣教師として働いているのはすべて姉妹たちだけです。

「自分の言葉で」

ソルトレーク神殿、タバナクル、アッセンブリーホール、二つの訪問者センター、幾つかの開拓者記念碑、ジョセフ・スミス記念館などのある、全部で数ブロックというとても小さなこの伝道部の中で、姉妹宣教師たちは「すべての人が自分の言葉と自分の言語で完全な福音を聞く」（教義と聖約90：11）という預言の成就の一環としてその働きをしています。

テンプルスクウェアには数多くの国々からたくさんの人々が来るために、ここで働く宣教師たちの間には、世界中の伝道部で話されている様々な



テンプルスクウェア訪問者を歓迎するタヒチのピラエ出身のトリ・タヒアタ姉妹。

れた伝道部

言語が話され、恐らく世界で最も国際色の強い伝道部ということができましょう。昨年、3万台の長距離バスがここに運んで来た観光客のうち、半数以上は非英語圏の国々から来た人々です。templスクウェアでは常時30以上の言語が話されているのです。

フランスのニース出身のナジェ・ラウ姉妹は、templスクウェアで働くようにとの召しを受けたとき、胸が躍る思いをしました。そこで働くということは、自分の話せるフランス語、スペイン語、英語、ヒンディー語、アフリカーンス語を用いて伝道するということを意味したからです。訪問者の数が年間でいちばん多い夏の数か月、ラウ姉妹はこれらの言語の幾つかを毎日話しています。

フランス、ボルドー出身のミレーユ・バン・トンダル姉妹も、アフリカーンス語、フランス語、オランダ語、英語、ドイツ語の5つを話します。彼女は最近、南アフリカから来た一人の若い女性と話しました。南アフリカで生まれたバン・トンダル姉妹は、その訪問者に彼女の国の言葉で話すことができました。その若い女性は、教会が南アフリカにもあり、帰国したらそこで宣教師の話の聞けると知って驚き、とても喜んでくれました。

「見つけるという点において、わたしたちは非常に成功しています」

南アフリカから来たこの若い女性と

同じように、templスクウェアの宣教師たちが話しかける訪問者の多くが、帰国後、ほかの宣教師から教会のことを学んでいます。伝道がこのような形で展開されるということもソルトレーク・templスクウェア伝道部の特色の一つです。ここで働く宣教師たちは一連のコースを巡り、説明を行いながら、イエス・キリストの神性と教会歴史について教えています。世界中の宣教師たちが行う標準的なレッスンはしません。また改宗者のバプテスマを自分で目にすることもありません。教会についてもっと知りたいと関心を示した人々の名前を、その人たちの住む地域の伝道部に送るのがおこなった仕事です。

templスクウェア伝道部の元部長、ロバート・チャールズ・ウィット兄弟はこう話しています。「ほかの伝道部の宣教師たちは、関心のある人を見つけ、教え、バプテスマを施し、フェロシップをするというすべてを行いますが、わたしたちは見つけるだけです。しかし、見つけるという点において、わたしたちは非常に成功しています。」

アメリカ領サモア出身のチェリ・レイド姉妹は姉妹宣教師たちの責任についてこう説明してくれました。「わたしたちは主の御手に使われる者です。ですから多くの人たちに証を分かち合っています。人々を強め、高めるために、主が彼らの生活の中で果たしてお

られる役割を理解してもらうこと、それがわたしたちの責任です。」

ペルーのリマ出身のエリカ・レカロス姉妹はtemplスクウェアでの奉仕についてこう話しています。「とても厳しい伝道部の一つだと思います。一生懸命働いても、その結果を目にすることがないので。自分の最善を尽くし、御霊を伝え、証をしたとしても、その後の結果を目にすることはほとんどないので。」

このtemplスクウェア伝道部の特殊性を考えて、ここで働く宣教師たちは18か月の伝道期間の4か月は、アメリカ国内のほかの伝道部で働くことになっています。これによって標準的なレッスンを行ったり、教会員と協力して働いたりする経験もできるのです。

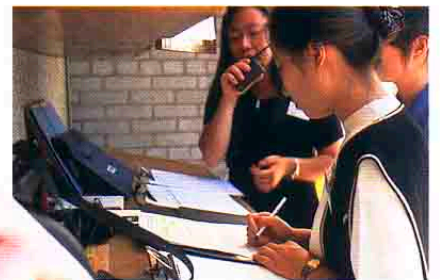
例えば、イタリア・ミラノ伝道部ノバラ支部出身のティツィニア・バシルカ姉妹はその4か月にニューヨーク州のニューヨーク南伝道部で働きました。ニューヨークとユタでは環境がまったく違いますが、バシルカ姉妹はそこで世界中から来る多くの人々を見て、templスクウェアのことを思い出したと言います。

templスクウェアでの働きを支えるもの

templスクウェアでの伝道が秩序正しく円滑に進むように、目に見えない所で多くの働きがなされています。



左上——証をするラオス出身のメイ・ニア・ヤン姉妹。右上——ウェルフェアスクウェアで皿を洗うアメリカ合衆国ワシントン州出身のスザンナ・クレイジ姉妹と同じくカリフォルニア州出身のメリッサ・フック姉妹。左下——リトアニアのビリニュス出身のイロナ・マチニッツ姉妹「わたしたちはイエス・キリストの福音の中で皆一つの文化を持っています。」右下——タバナクルで訪問者に語りかけるアメリカ合衆国カリフォルニア州出身のアンバー・ギブス姉妹。右下——活動時間帯の調整を行う香港出身のワイマンウィルマ・チュウング姉妹と韓国出身の文英黄姉妹、民生催姉妹。





上——テンブルスクウェアでの伝道を愛する韓国出身の民生 催姉妹はこう述べている。「自分の証を人々に伝えたいと強く望んでいます。」左——ドイツのハーレ出身のスッセン・コルネルツ姉妹は姉妹宣教師たちが楽しく働く理由を「それは御霊の力です」と語ってくれた。右下——一緒に学ぶペルーのリマ出身のエリカ・レカロス姉妹とトンガ出身のツボウ・ナイアタ姉妹。



幸いなことに、この伝道部の本部はテンブルスクウェアの中にあります。ですから、宣教師たちは毎日伝道部長と顔を合わせ、一緒に働くことができます。

姉妹宣教師たちの毎日の活動は、それぞれに異なる準備の日、奉仕時間帯、言語、訓練、見学コースなどに適合するように、周到に計画されます。宣教師たちの訓練や、様々なケースについて受ける割り当てには、150以上の細かな責任があります。それらの責任の中には、テンブルスクウェアに出入り

する訪問者へのあいさつ、訪問者の見学コースのガイド、インフォメーションデスクでの応対、家族歴史の情報を調べるためにファミリーサーチ・センターを利用する訪問者の手伝い、開拓者の勇気をうたった教会制作の映画『レガシー』（『われらの遺産』）を見たい人のための手配なども含まれます。

テンブルスクウェア伝道部の宣教師たちは、毎週数時間をほかの奉仕にも割いています。ソルトレーク・シティのウェルフェアスクウェアでの奉仕活動です。幾つかの福祉事業が行われ

るこのウェルフェアスクウェアで宣教師たちは、全世界の恵まれない人々に送るための古着の整理、監督の倉で働く人々の手伝い、英語を学びたいという人々に教える活動、缶詰工場、乳製品工場での作業などを行っています。



リトアニアのビリニユス出身のイロナ・マチニツ姉妹はテンプルスクウェアで一人のロシア人男性に会ったときに、ウェルフェアスクウェアでの体験が伝道にも役立つことを実証しました。その男性の国の言葉で話すことのできた彼女は、彼が助けを必要としていることを知り、ウェルフェアスクウェアの援助手段を活用して助けました。彼は別れ際に感謝の言葉を述べ、いずれ教会の親切にこたえたいと約束しました。

ほかのすべての宣教師たちと同じように、テンプルスクウェア伝道部の宣教師たちにも週に1度の準備の日があります。また、伝道地区集会、ゾーン大会、任地の変更などの点でも、ほかの伝道部の宣教師たちと大体同じです。任地の変更があると、アパート、担当区域、準備の日、活動時間帯などが変わることもあります。

テンプルスクウェア伝道部の専任宣教師はすべて姉妹たちなので、指導や訓練を与えるのも姉妹たちです。この伝道部にはもう一つユニークな点があります。それは、姉妹宣教師たちがすべての時間を同僚と一緒に活動に使わないという点です。テンプルスクウェアで同僚として一緒に働くこともありますが、各自に別々の割り当てが与えられることもよくあります。

「神がわたしたちを通して御業を進められる」

テンプルスクウェアでは、総大会、タバナクル合唱団のリハーサルや本公演、アッセンブリーホールでの各種コ

ンサートなど、人の思いを高める様々な活動が行われるために、霊的な感動の体験が頻繁に味わえます。また姉妹宣教師たちは月に2回準備の日にソルトレーク神殿に参入することもできます。

トンガ出身のツボウ・ナイアタ姉妹はそのような喜びがある一方で、様々なチャレンジもあることを次のように説明しています。「テンプルスクウェア伝道部では、霊的な意味での大変さに比べたら、肉体的なつらさはそれほ

トンガ出身のレシエリ・ホロカウカウ姉妹は、テンプルスクウェアで最も素晴らしい経験は証を分かち合い、人々が御霊を感じられるように助けることと話す。



どでもありません。どんなときでも模範を示し、笑顔を絶やさず、御霊を受けるといふ大変な責任があるのです。神がわたしたちを通して御業を進められるというのは、大変なことなのです。」

香港出身のレイ・チョン・ウォン姉妹はあるとき中国から来た7人の訪問者を連れてコースのガイドをしたことがあります。その中の二人は彼女に難しい質問を次から次へと浴びせ、一緒にいるほかの人たちに様々な否定的なことを言いました。このようなことは決して珍しくはありません。教会について偏見を持った状態でテンプルスクウェアに来る人もよくいるのです。しかしウォン姉妹は御霊の強い力によって、二人の質問のすべてに答え、ほかの同行者たちに御霊を感じさせることができました。

テンプルスクウェアで働くすべての宣教師に共通しているのは、主と人々への愛です。テンプルスクウェアを一つにしている偉大な力は主の御霊です。宣教師たちの文化の多様性は問題ではありません。様々な異なる言語を話すということも問題ではありません。テンプルスクウェアで働きを共にしている宣教師たちは、確かに心一つにしています。

「テンプルスクウェアでわたしが仕える時間は、やがて終わります。でもわたしは心の中にいつも宣教師としてのこの名札を着け、生涯伝道が続けていきます。」レカロス姉妹は全世界で伝道する宣教師たちの思いを表現して、こう言いました。□



クリスマスのテンプルスクウェア。写真撮影／クレグ・ダイヤモンド

毎年クリスマスのシーズンには数多くの人々が特に美しくライトアップされたテンプルスクウェアの夜景を楽しみに来る。1963年から始まって、年々、その規模と美しさを増し加えてきている。準備作業は8月から始まり、樹木や芝生に約30万個の装飾用の電球が張り巡らされる。飾りの中心は、実物大でキリスト降誕の様子を再現するシーンで、『聖書』に書かれたクリスマス物語のナレーションが流される。タバナクル、アッセンブリーホール、訪問者センターでは、毎夜コンサートが開かれる。



毎年、何万人もの訪問者がテンプルスクウェアの美しさを堪能している。そしてその多くが福音の美しさにも感動し、そこで働く宣教師から学んでいる。本誌「テンプルスクウェア」34ページ、「全世界に開かれた伝道部」44ページ参照。



教会の指導者、 香港の首脳陣と会う。

ホンコン



ジェームズ・E・ファウスト副管長（右から2人目）とラッセル・M・ネルソン長老（左から2人目）は、中華人民共和国香港特別行政区の行政長官、董建華氏（写真中央）と会談した。写真右端は戴國源長老、左端はジョン・H・グローバーク長老。

最 近行われた会談で教会の指導者は、7月1日に香港がイギリス統治から中国政府に返還された後も引き続き、香港在住の人々すべての宗教の自由が保証される、との確信を得た。

これは、中華人民共和国香港特別行政区の行政長官である董建華氏との会談で、明らかになった。会談の教会側出席者は、ジェームズ・E・ファウスト第二副管長、十二使徒定員会のラッセル・M・ネルソン長老、七十人でアジア地域会長会の戴國源長老およびジョン・H・グローバーク長老である。

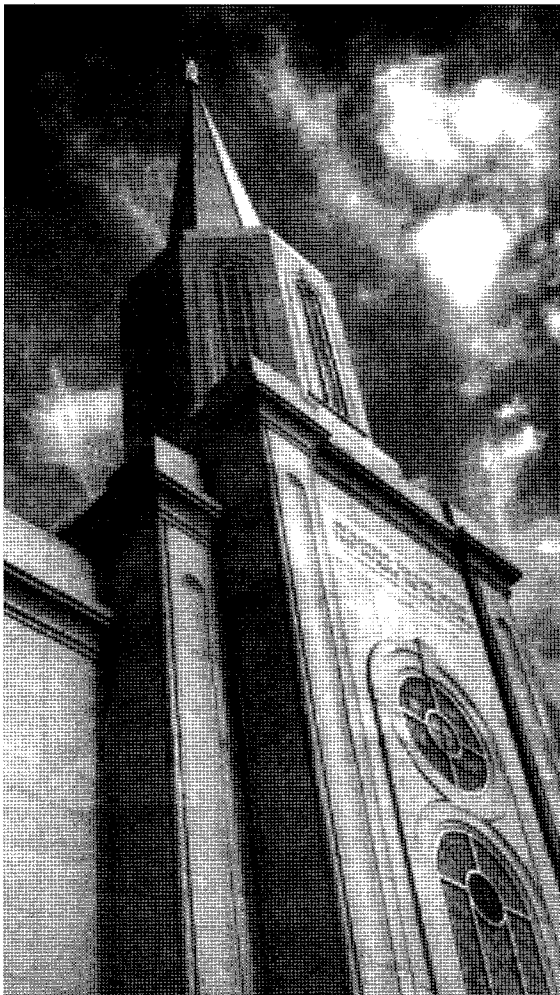
会談の中で、ファウスト長老は董建華氏に、

香港での教会の歴史について述べた。その中で、教会員や宣教師の活動にも触れ、教会の人道的救援活動について概説し、香港神殿が建てられていることへの感謝を伝えた。

ファウスト副管長は会談で次のように述べた。「わたしたちの会員はどこに住んでいようと、王、大統領、統治者、長官に従うべきこと、法律を守り、尊び、支えるべきことを信じています。この地の教会員も教会の指導者も、この国の繁栄を祈っています。」

香港滞在中、ファウスト長老とネルソン長老は、香港の5ステーク合同の地区大会にも出席した。□

セントルイス神殿の奉獻



1997年6月1日、ゴードン・B・ヒンクレー大管長はミズーリ州セントルイス神殿の奉獻式において奉獻のための最初のセッションを管理した。この神殿は現在運営されている50番目の神殿に当たり、またミズーリ州で最初の神殿となる。

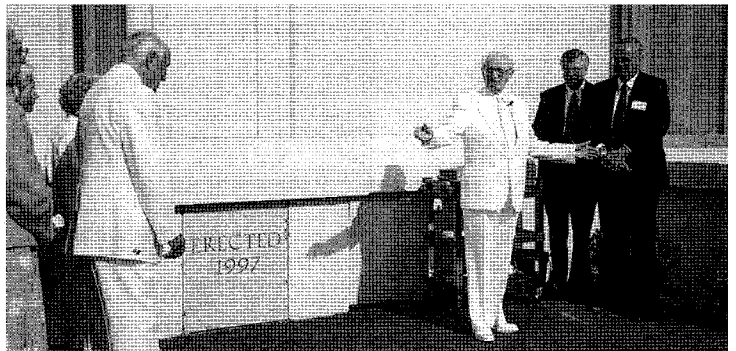
奉獻式のセッションは最初のセッションを含めて合計19回行われた。最初のセッションに先立って、ゴードン・B・ヒンクレー大管長、十二使徒定員

会のL・トム・ベリー長老とデビッド・B・ヘイト長老、七十人定員会のヒュー・W・ピノック長老が説教を行った。

説教が終わると教会指導者は神殿の外へ出て、定礎式に臨んだ。ヒンクレー大管長は短く話をした後、隅石の溝にモルタルを詰めた。

奉獻式に先立って、4月26日から5月24日まで神殿のオープンハウスが行われた。オープンハウス組織委員会では10万人の入場者を見込んでいたが、実際には26万人が新しい神殿を訪れている。

神殿はミズーリ州セントルイスの西20マイル（32キロ）の市街地に建てられている。□



ミズーリ州、セントルイス神殿の外で定礎式出席者を歓迎するヒンクレー大管長(中央)
PHOTOGRAPH BY DUANE POWELL

教会の代表者、家族世界会議に出席

「西暦2000年に近づくとつれ、世界中で家族の衰退が著しくなってきました。しかし希望の兆しも見えてきました。人類史上重要なこの時期に、わたしたちはともに力を合わせ、どこの国にあってもその中枢を成す家族の強化を目指さなくてはなりません。」1997年3月19日から21日にかけて、チェコ共和国のプラハで開催された家族世界会議の開催者はそのように記述している。

教会の公式代表者も、41か国600人が参加したこの会議に出席した。七

十人でヨーロッパ東地域会長会会長のチャールズ・ディディエ長老は、同じく七十人で太平洋地域会長会副会長のブルース・C・ヘーフェン長老と当時中央扶助協会会長で最近解任となったイレイン・L・ジャック姉妹とともに出席した。ヘーフェン長老および、ブリガム・ヤング大学の法学教授リン・ワードル氏、リチャード・ウィルキンス氏は、同会議で演説をした。さらに大管長会および十二使徒定員会により発表された「家族——世界の宣言」(『聖徒の道

1996年6月号, pp.10-11) が15の言語で用意され、配布された。

会議の開催者は家族についてこう語っている。「家族とは一人の男性と一人の女性が、生涯続く結婚の聖約で結ばれることであり、その目的は人類を存続し、子供を養育し、適切な性行動をし、互いに助け合い、保護し合い、利他的な家政を築き、世代間のきずなを維持していくことです。」この会議開催の3つの目標は、「家族の衰退に共通する原因の調査をすること、諸国に住まう家族から世界中の政府に向け

て、家族と行政の適切な関係について討議し、その宣言を發布すること、家族生活の繁栄を最も促すうえで必要な社会的・経済的背景の定義づけを行うこと」であった。

ディディエ長老は次のように述べている。「メディアを通して日々伝えられる最近の傾向を見ると、人々の知的・政治的な観念が家族構造と家族の真の価値に相反していることが分かります。このような傾向は、もし変わらなければ、わたしたちの文明を破壊することになるでしょう。今回の会議で、初めて、大多数の国々が家族を攻撃するものに対して懸念を示しました。演説者は、家族が幸福になるための天与の律法を、改めて強調していました。」

ヘーフェン長老は演説の中で、「激情をすべて制し、愛で満たされるようにしなさい」という、アルマ書第38章12節を引用した。そして、次のように語った。「家族の律法は昔から、人間の激情を制してきました。そして律法により期待されていることが明らかにされ、またわたしたちが長きにわたって愛にあふれた家族関係を築けるように、方向づけをしてきていました。このように制するものがなくては、わ

たしたちの激情や原則は奔放になり、個人にとっても社会にとっても害を及ぼします。」

さらにヘーフェン長老は、子供たち一人一人の自主性が強調される昨今の世界的な傾向についても触れ、次のように述べた。「子供の権利や自主性にすべてをゆだねてしまうことは、時として親の責任を軽減してくれますが、実際は子供を大いにながしろにしているのです。」また、社会が同性愛に対して寛容になってはいるものの、大多数がまだ同性間の結婚に反対であるという現状については次のように語った。「黙認されていることすべてを法律が是認するなら、最終的にわたしたちは、すべてを黙認するようになり、黙認されていることでなければ何事も是認なくなってしまうでしょう。そのことを、ほとんどの人々は直感的に感じているのです。」そしてヘーフェン長老は次のように述べて演説を閉じた。「激情を制するなら、家族を成長させることができますが、激情を制しなければ家族は破壊してしまいます。」

リン・ワードル教授は、いかに「社会の一部で同性間の結婚が強く支持されているか」について論じた。特に娯

楽のメディアや学術界でその傾向が強いことを指摘し、それと対比してワードル兄弟はこう述べた。「異性間結婚は、これまで法的に断然優先されてきました。それは異性間結婚が国家、社会、そして個人に対して、かけがいのない価値ある貢献を果たしてきたからです。異性間結婚は……より好ましい状態として、えり抜かれてきたのです。なぜならそれは社会や国家の安寧と維持にとって重要であり、価値があるからです。……同性間結婚を主張する風潮は、わたしたちとこの世代全体へのチャレンジとなり、結婚制度の重要性を再確認することになるでしょう。」

ジャック姉妹は次のように述べた。「多くの機関が家族の価値を重要視していると知り、励まされました。お互いが団結し、強め合うときに、大きな力が生まれます。特にニカラグアの教育大臣の考えに感謝しています。こう言われました。『学生たちに真理への愛を促すべきです。それは彼らに高い倫理観と幸福への道を開くことになるからです。わたしたちは、喜びをもって教える必要があります。両親や教師は、悲観的な態度で価値観を教えることができないからです。』」□

国際機関誌の推移

1846年に、ウェールズの宣教師ダン・ジョーンズが初の末日聖徒の教会機関誌をウェールズ語で出版した。当時この機関誌の発行数は32であった。1851年には、デンマーク語、フランス語、ドイツ語の3種類の教会機関誌が別々に発刊を始めた。世紀が変わるころには、スウェーデン語、オランダ語の機関誌が加わった。

今日、^{こんにち}教会の機関誌は英語を含め、23の言語で発刊されている（日本では『聖徒の道』として発行）。□



再組織された秋田地方部長会

去る5月18日、仙台伝道部の吉野和洋部長管理の下に開催された秋田地方部大会で、1995年より地方部長の責任を果たしてきた乳井恒夫兄弟が解任され、新たに小林久兄弟（写真中央）が召された。第一副地方部長には横山昭彦兄弟（写真左）が、第二副地方部長には進藤伸之兄弟（写真右）が召され、その任に当たる。



心を常に主に向かわせて

秋田地方部長
小林 久

昨年の10月、鶴岡支部の副支部長をしていたときに、地方部から隣の酒田支部と合同で集会ができないだろうかという話がありました。それはつまり、鶴岡支部が酒田支部に吸収されてなくなるということを意味していました。鶴岡支部を愛する会員たちは支部を存続させ、またさらに大きくするという目標に向かい一つとなって熱心に働きました。その結果、無事に支部は存続することになりましたが、仕事が大変忙しいにもかかわらず、献身的に支部のために働く支部長さんの姿にわたしたちはほんとうに心を打たれました。

人生の棚卸し

そのような中でわたしは、「自分はこのままでいいのだろうか」と自問しました。神権者として、副支部長として神様のために一生懸命働いているだ

ろうか、ただ責任感だけでやっているのではないだろうか。そして、はっと気づきました。自分自身、家族、教会、仕事、地域社会を大切にしようと思いがけてきたつもりが、実際は「仕事が忙しいから」、「家庭の都合で」といって合理化し、大切なことをおろそかにしてきたような気がします。心の向きをいつも内側に向けていた自分をとて恥づかしく思いました。そして、わたしはそのとき決心しました。心を常に主に向けて、何をなすにもまず主のためになそうと。そして今、自分が何をすべきで、何ができるのか本気で導きを求めるようになりました。この経験は、この5月に秋田地方部の部長として召されるに当たってほんとうに良い備えとなりました。自分を見詰め直す人生の棚卸しだったと思います。そして、少しの勇気を出して行ったときに証は強められ、難しい問題が起こってもひるまず信仰をもって立ち向かって行くときに喜びを感じ、そして成長するのだということを強く感じるよ

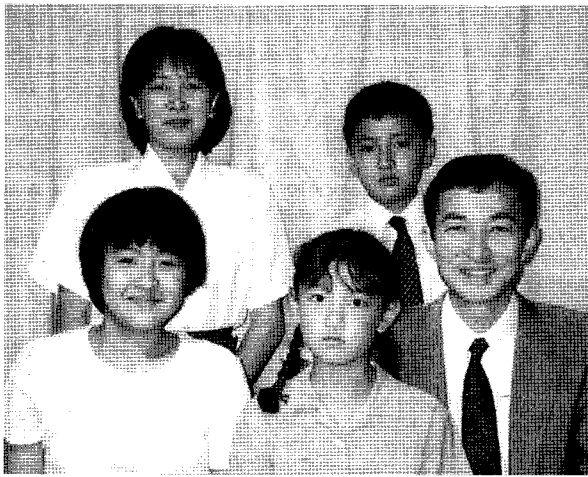
うになりました。

喜びと祝福をもたらす奉仕

福音は家族や隣人へ奉仕し助けるように教えています。しかし、助けを伸べるつもりでやったことも結局は自分に返って来るということを学びました。わたしは、ホームティーチングを精いっぱいやって、できる限りの助けをしているつもりでしたが、振り返ってみると自分がしたよりも、もっと多くの助けを担当している家族から受けていることに気づきました。励まし、動機づけるより、励まされ、動機づけられることの方が多かったのです。主に心に向けて、福音を積極的に実践するなら、教会も、仕事も、地域への奉仕も、もっともっと楽しくなります。そして、福音を実践する祝福は家族へも及びます。「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられる」（マタイ6：33）ということは確かだと思っています。

家族と教会員の 助けあればこそ

すばらしい指導者の方々、伝道部、



小林ご家族

地方部、支部の兄弟姉妹たちの働きと助けに感謝しています。そして、いつもわたしを支え、理解を示してくれる妻に感謝しています。先の地方部大会で妻は、偶然にもわたしと同じくニューフェイス第一書3章7節の「わたしは行って、主が命じられたことを行います。主が命じられることには、それを成し遂げられるように主によって道が備え

られており、それだけでなく、主は何の命令も人の子らに下されないことを承知しているからです」という聖句を引用して証をしてくれました。改めて心が通じ合っていることを知りうれしく思いました。また、神様から授かった3人の子供たちにも感謝しています。

主に頼り、 すべてをなす

信仰とは「忍耐すること、謙遜けんそんになること」と聞いたことがあります。忍耐とは我慢することではなく、試練を進んで受ける積極性であり、謙遜とは、神の息子、娘であるという自信に裏づけされた強さのことです。わたしはほんとうに弱い者ですが、このような信仰を持ちたいと思います。また『神の業と計画と目的がくじかれるこ

とはあり得ず、またそれらが無に帰することもあり得ない。……覚えておきなさい。くじかれるのは神の業ではなく、人間の業であることを覚えておきなさい』(教義と聖約3:1-3)という聖句を覚えて、秋田地方部の人々が常に主を頼り主に心に向けてすべてをなすときに、真の喜びを得られるようにこの尊い責任を果たしていきたいと思えます。(こばやし・ひさし)

小林久地方部長の紹介

1961年、山形県鶴岡市生まれ。1980年に改宗(19歳)。鶴岡高専を卒業し、現在医療材料メーカーに勤務。1982年に土屋伸姉妹と結婚。1男2女がいる。長男・正旗(14歳)、長女・亜紀(12歳)、次女・卓織(10歳)。これまで日曜学校教師、長老定員会会長、副支部長などの責任を果たしてきた。秋田地方部鶴岡支部に所属。

神殿訪問1,000キロの旅

——青春18キップで旅した山口地方部青少年——



山口地方部長
平松 彰

山口地方部では「1997年春の青少年神殿参入ツアー」が、11人の青少年と指導者により3月31日から4月4日までの4泊5日で行われました。すばらしい青少年たちと東京神殿に参入して、儀式を執行し、証を分かち合えたことはわたしにとって特別な経験でした。

山口から東京神殿までの約1,000キロの道程を青春18キップで、しかも20時間以上をかけて乗り継ぎ、乗り継ぎしていく旅は、あまり快適な旅とは言えないかも知れません。

鈍行列車での行程は単調なうえに、長時間同じ姿勢で座席に座っているため、腰の痛みにも忍耐しなければなりません。さらに何回もの列車の乗り換えがあります。その度ごとに人波にもまれながらプラットフォームを移動し、点呼。また座席を確保するために列を作り、次の電車を待ち……と、いろいろ大変なのです。わたしもそうした旅の疲れからか、うとうとしながら、目が覚める度に車窓の景色を確認しながら青少年に目をやると、にぎやかに話し合っていた彼らも次第に気持ちよさそうに寝入っていました。

このような旅でしたが、しかし昔の開拓者たちが大平原を横断したことを思うと、この東京神殿への旅は、まだ快適で楽しいものであったと思えます。

さて、神殿に到着し、わたしは死者のための身代わりの儀式を施す祝福を頂きました。青少年の兄弟姉妹は延べ1,000人以上のパプテスマを受けました。また儀式の合間には、1901年にヒーバー・J・グラント大管長が日本で奉獻の祈りをささげられた横浜の地を訪ねたり、管理本部の東京神殿ネームズプロセッシング課を見学したりと楽しく有意義な時間を過ごしました。

今回、儀式を執行するときに強く感じたことが二つあります。

一つは死者の方々が心からの喜びの声を上げておられるということです。その喜びの気持ちを感じるときに、わたしは永遠の価値ある喜びは福音からもたらされることをはっきりと確認することができました。

もう一つは、死者のために身代わりの儀式を受けている青少年が何と若くして主に従順であり、熱心かつ献身的な兄弟姉妹であり、心から信頼のできる力強い主の僕であるかということです。すばらしい可能性を秘めた彼ら一人一人を心から誇りに思えます。

彼らがこの世に生まれる前に、天父と何か大切な約束を交わしたうえで末日に地上に置かれたことを強く感じます。

若い兄弟姉妹が、神殿参入の経験を通して10年後の宣教師や指導者となる備えをしていることに感謝しつつ、彼らが現代の開拓者としてさらに力強く、信仰込めて、一歩ずつ歩むことを心からお祈りいたします。(ひらまつ・あきら)

青少年の証から(抜粋)

●来るときはけっこう大変だったけど、死者のためのバプテスマで役に立ててよかった。(小野裕二・山口支部)

●最後にとってもいい気持ちになった。また神殿に入りたい。(千葉 昇・山口支部)

●とても聖い所にいるという感じがしてうれしい反面、ぼくみたいな人が神殿に入っているのかという不安もあった。約2年ぶりだったけど、何回参入しても、とても霊的な気持ちになって心が落ち着く。こんな気持ちが神殿の外でも保てたらいいと思った。バプテスマの順番を待つとき退屈してしまった。そんな気持ちで儀式を受けては、自分も嫌だし、死者の方々も嫌がられると思ったのでお祈りをすると、また霊的な気持ちになれて退屈だと思わなくなった。(斉藤直樹・宇部支部)

●時間をかけて来たかかった。神殿に入るといい気持ちになって、なんだか普通とは違う気分だった。(斉藤陽介・宇部支部)

●神殿の中に入る瞬間、心がほんとうにとっても熱くなった。気持ちがよかった。(渡壁正明・宇部支部)

●神殿に入ると、外にいるときとは違っていい気持ちになった。(山野大志・宇部支部)

●鈍行列車で来て、とても疲れたけれど、神殿に入ると体が軽くなってとても落ち着いていた。(月野義也・防府支部)

●死者の方々の年代を見ると100年以上前の人々だった。きつとずーっと待っていたんだなあと思うと来てよかった。家族歴史部の系図についての説明は楽し

かった。早くあの中にわたしの家族の系図を入れたいと思った。(渡壁敬子・宇部支部)

●家族ファイルで自分の先祖の儀式を受けることができてよかった。

(山野 幸・宇部支部)

●バプテスマを受けることによって少しは疲れが取れたような気がする。今回は準備(『聖徒の道』を読む、聖典を読む、お祈りをする、知恵の言葉を守る)をよくしたのでとても霊的な気持ちで過ごせた。(西野聡美・宇部支部)

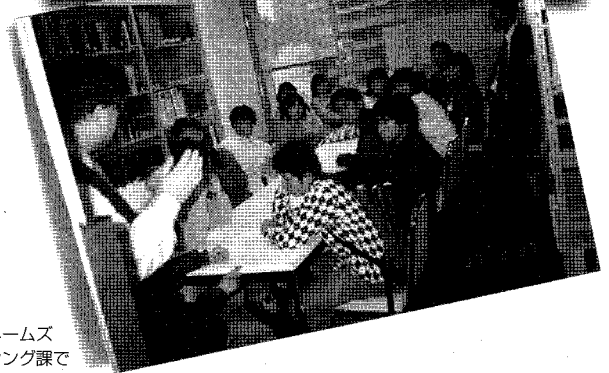
●今回初めて自分で調べ自分で書いた系図で儀式を受けました。終わったときとても温かい気持ちに満たされました。話したことも、顔を見たこともないわたしの先祖が「ありがとう」とささやいてくれたようでした。神殿はとても静かで聖い所でした。(高橋千佳子・防府支部) □



行きの車中にて



夜行列車にて到着した早朝の神殿の前で



東京神殿ネームズ
プロセッシング課で説明を受ける青少年たち

配送センターだより

8月1日より、英語版定期刊行物および国際機関誌の購読料を以下のように値下げします。

●英語版定期刊行物

『エンサイン』4,700円→	3,240円
『ニューエラ』『フレンド』各4,500円→	各3,000円
『チャーチニュース』11,700円→	10,000円

*複数種類お申し込みの場合

『エンサイン』+『ニューエラ』+『フレンド』8,200円→	6,000円
『エンサイン』+『ニューエラ』または『フレンド』7,100円→	4,320円
『ニューエラ』+『フレンド』5,500円→	4,080円

(『チャーチニュース』との組み合わせについては割引がありません。)

●各国語の国際機関誌

『リアホナ』(スペイン語版、ポルトガル語版)4,700円→	3,240円
『リアホナ』(英語版)4,700円→	2,700円
(英語版に関しては大会号を除く10か月分になります。)		
中国語版・韓国語版4,400円→	2,880円

そのほかの外国機関誌、および複数冊の場合の購読料については、配送センター(TEL.03-5668-3391)へお問い合わせください。

「選ぼう、選ぼう、正義の道を」

奈良支部 佐々 正登



ぼくたちは今、プライマリーで11月に発表する、正義を選ぶことについて勉強をしたり歌の練習をしたりしています。

そのために『聖徒の道』2月号にのっていた、「わたしの福音の標準」のページを切って12枚のカードを作りました。そのうちの1枚は自分で標準を決めました。ぼくの標準は「夜、個人のおいのりをします」というのです。また2月には、カレンダーを作って正義を選べた日には丸を付けました。それから聖典を読めた日には色をぬりました。2か月間やってみましたが、守れなかった日もありました。ぼくにとって守りやすかった標準は、友達に親切にすること、ち恵の言葉を守ること、正直になること、安息日を守ること、清潔な服を身に着けることです。

でもぼくは時どき、乱暴な言葉づかいをしたり、自分で決めた「夜、個人のおいのり」をしない日があるので、いつも正義を選ぶことは難しいなーと思いました。

ぼくは春休みに大阪ステーキのプライマリー通信にのせるカブスカウトのお話をたのまれたので、楽しかったことや、つらかったこと、やってよかったことなどを書いて送りました。

先週の月曜日にぼくは、図書券が1枚残っていたので、一番下の弟にウルトラマンゼアスの本を買ってあげました。もうぼくの図書券は1枚もありませんでした。次の日の火曜日、ぼくのお話ののったプライマリー通信が届きました。その中には、ぼくがとてもほしかった手塚治虫と鉄腕アトムの手と、図書券が1枚入っていました。とてもうれしかったです。

家のお手伝いをしたり、弟の面倒をみることも立派な正義を選ぶことだとプライマリーの先生が作ってくれた紙しばいから学びました。このお話をまとめている時、弟はぼくの上ぐつも一緒に洗ってくれました。

いつもぼくたちにたくさんのことを教えてくれているプライマリーの指導者や先生、またカブスカウトの隊長さんやリーダーの人にも感謝しています。
(ささ・まさと)



御霊の聲に耳を傾け

名古屋西ステーキ福德ワード

松本 紀子



「お久しぶり!」「ローズカンファレンスへようこそ」……わたしたちの再会はこの会話から始まりました。というのも、この第1回ローズカンファレンス(神殿結婚を希望する人のみを対象にしたカンファレンス、96年9月開催)の前に参加した結婚カンファレンスで出会っていたからです。

わたしは改宗前に一度結婚して別れ、二人の子供がいましたが、インスティテュートの「日の栄えの結婚」コースを受講するうちに、神殿で永遠の結婚をしたいという確固とした希望を抱くようになりました。そこで、各地で開催される結婚カンファレンスに前向きに参加してきましたが、なかなか自分の伴侶だと思える人に出会えずにいたのです。

ローズカンファレンスのプログラムの中に一对一のデートタイムがありました。これは3人の人と自分で約束を取りデートするものでした。そこで彼との再会を喜び、以前参加したカンファレンスの話をする中で、お互い少しだけ気になる存在であったことを知りました。

セミナーのとき、指導者のアドバイスの中に「あなたが安心できる方が伴侶です」という言葉がありました。わたしと兄弟との間には、話しているつも平安な気持ちがありました。

そこで、結婚を考えたとき障害になるかなと思っていたことをお互い正直に尋ねることができました。わたしにとってそれは、兄弟との年齢差と自分に子供がいるということでした。それまでは、いざ現実に結婚という話になると、年齢や子供のことは大きなネックになることが多かったのです。

ところが驚いたことに、兄弟から返ってきたのは、「なぜそんなことが問題なの?」という言葉でした。「そのときの状況がどうであろうと、永遠に続くのは姉妹自身との関係なのだから。この世的に見れば、こうした結婚は大きなリスクを伴うのかもしれないけど、永遠の見地から見れば問題じゃ

ない」……わたしはそれまで一度もそんなふうに言われたことはありませんでした。兄弟にとって、唯一の気がかりは、わたしの前の結婚が神殿結婚であったかどうかということだけでした。そのときわたしの心に深く残ったのは、「いろんなことがあると思うけれど、必ず解決できるから。ほくはそう確信してるから何があっても大丈夫。どんなことでも少しずつ解決して乗り越えていこう!」という兄弟の力強い言葉でした。

カンファレンスが終わって2週間後、わたしたちはともに神殿に参入する機会がありました。わたしが日の栄えの部屋へ入ったとき、兄弟は部屋の中央のイエス様の絵の前にたたずんでいました。ふだんのわたしでしたら、そのとき彼に合図してこちらへ手招きしたかもしれません。しかしなぜかそのとき、ふと、兄弟のそばへ行かなければならない、と強く感じました。わたしが彼に近づくと、兄弟はわたしにプロポーズしてくれました。

後で聞くと、兄弟は「結婚は早くから心に決めていたが、いつプロポーズするかは御霊の導きに任せようと思っていた。あのときはふと、姉妹が歩み寄ってきたらプロポーズしようという思いが浮かんだ」のだそうです。

やがて小学校の運動会という機会を捉えて子供たちにも会うことになりました。

兄弟は大学時代に、児童福祉関係の専攻を通して子供と接する機会がありましたが、再婚の家庭の子供たちが新しい親にそっぽを向くという事例を多く目にしており、自分の場合もそうなるのではと少し心配していました。

しかし、このとき初めてであったにもかかわらず、子供たちはすっかり家族のような雰囲気の中で兄弟と接しました。そこで仲良くなるとともに、子供たちへのプロポーズもしましたが、泣かれたり無視されたりしないかなと思

っていた兄弟は、その心配が要らなかったことに少しの驚きを感じました。そして子供たちも、前世にあっては自分と同様に神様の子供であり、兄弟姉妹であったことを確信したのでした。

3月29日、ほんとうに多くの方々の立会いをいただいて、わたしたちは東京神殿に入り、永遠の結婚と親子の結び固めを受けることができました。日の栄えの部屋に二人でいるとき、心に特別な温かさと平安を感じました。また、ふだんやんちゃな子供たちも穏やかに儀式を受けることができました。それまで兄弟のことを名前で呼んでいた子供たちは、儀式の後すぐに「お父さん」と呼び始め、もう10年もずっと親子であったかのように違和感なく今に至っています。

兄弟は振り返ってこう言っています。「以前から姉妹のことはちらちらと思いの中に出てきていました。おこがましい言い方だけど、彼女と子供たちのことを『何とかしなければいけない』という思いが強くなってきて、そう考えていくと、様々なことが軌道に乗ってきました。それらの出来事の中に御霊の導きを感じます。人には選択の自由があるけれども、それを上手に使うことが大切だと思う。導きに従順であることが正しい道でした。」確かに物質的にも、思わぬ様々な祝福を受け、結婚当初心配だった経済的な問題も無理なく乗り切れました。どんな障害があってもあきらめず、神殿で結婚することの大切さに対して前向きであれば、道は開けることを証いたします。(まつもと・のりこ 初等協会教師)

●96年9月に開催された第一回ローズカンファレンス(参加者延べ60人弱)からは、その後1年以内に、松本ご夫妻も含めて4組の神殿結婚が行われました。今年の第二回ローズカンファレンスは犬山(愛知県)にて10月10日から3日間、行われる予定です。参加受付期間は8月末日まで。詳しくは各ユニットの監督、支部長さんまでお問い合わせください。□

48年後の結び固め

— 同じ希望を持って永遠に —

秋田地方部鶴岡支部

中山よし子

わ たしは17年前に改宗して以来、自分なりに努力して教会に集ってきましたが、夫は宗教に関して無関心でした。しかし、宗教は各自の自由だからとわたしが教会に集うことは認めてくれておりました。しかし、だんだん時がたつにつれて結び固めの儀式的な必要なることを深く考えるようになりました。

思いがけず始まったレッスン

夫は自然への感謝の気持ちを日ごと抱えておりましたが、それを創造なさった神のことは知りませんでした。そして、自分が正しいと考えることには自己主張の強い人でした。その夫が、体の不調もあってか自分なりにいろいろ考えることがあったのでしよう。突然『モルモン書』を学びたいと言いました。それならばと、わたしは喜んで宣教師に連絡を入れ、早速レッスンを始めてもらいました。それから3か月後にバプテスマの話をして目標の日が決まりましたが、夫は「しやうぶん」の半分の一やほかにも心にかかることがあったようでバプテスマを1年後に延ばしたいと言いはじめました。

すべては解決されて

「見よ、現世は人が神にお会いする用意をする時期である。まことに、現世の生涯は、人が各自の務めを果たす時期である。……………最後まで悔い改めの日を引き延ばすことのないように切に勧める。永遠に備えるためにわたしたちに与えられている現世の生涯を終えると、見よ、もしわたしたちが現世にいる間に時間を有益に用いなければ、後から暗闇の夜がやって来る。そして、そこでは何の働きもできない」(アルマ34：32—33)という聖句が心に浮かんできました。そこで何として

いと祈っていたところ、宣教師や教会の兄弟たちからたくさんの助けや励ましを頂き、気にかかっていた問題も解決して、1994年7月31日に予定通りバプテスマを行うことができました。そのバプテスマを見て胸が痛くなるほどの喜びと感激を味わいました。

念願の結び固め

1995年10月27日、市民結婚をしてから48年10か月、神殿で待望の結び固めの儀式を受けることができました。夫は76歳、わたしは73歳でした。夫との結び固めは、夫より長生きしてわたしが死者との儀式としてするしかない

だろうと考えておりましただけに、この世において夫と神殿の聖壇にひざまずいて永遠の聖約を交わすことができた最高の祝福を深く深く感謝しております。そして、教会員の皆様の愛によって現在のわたしたちがありますことを感謝しております。藤村第一副伝道部長さんは、「死者の儀式を行っても望みがかなっているかは分かりません。この世の儀式を行うほど確かなことはないですよ」と祝福してくださいました。夫ともども同じ希望を持ってこれから歩み続けることの幸せを大切にしていきたいと思います。「神のなされることは皆その時にかなって美しい。神はまた人の心に永遠を思う思いを授けられた。それでもなお、人は神のなされるわざを初めから終りまで見きわめることはできない。」(伝道3：11) (なかやま・よしこ)

人生の目的を探して

— 『モルモン書』が導いた改宗への道 —

秋田地方部鶴岡支部

中山俊夫

わ たしが『モルモン書』に出会ったのは、1991年のある日の夕方でした。帰宅途中で若い外国人から呼び止められ、英会話のレッスンに出てみないかと勧められました。わたしはそのころすでに71歳を超えておりましたのでまったくその気持ちはないと断りましたら、1冊の本を差し出し「ぜひ読んでほしい」と勧められました。それが『モルモン書』だったので。わたしは宗教にはまったく関心がなく、しかも当時は甚に熱中し、毎日クラブに通っておりましたから無駄になるからと断ったにもかかわらず熱心に勧めるものですからむげにも断り切れず頂いて帰りました。

実は当時すでに、妻は熱心な教会員でした。しかし彼女はわたしの頑固な性格や信条をよく理解しその生活態度に不平不満も言わず、教会員らしくわ

たしに時が来るのを待っていたのでした。わたしの方も妻に対しては自由に任せ干渉せず、子供たちには放任主義を貫いてきました。

わたしの父は旧制中学の校長を務めた教師でしつけは厳格でしたが、特に信仰を持っているわけではなく宗教には無関係の家庭環境でした。また、わたしが育った当時の日本は、現人神といわれた天皇統治の軍国主義時代でしたので、異国の文化にはなじめない(特に精神文化)環境が満ちあふれていました。そのようなこともあって、たまたま話題が神に及ぶとわたしは学校で教わった生はんかなダーウィンの進化論を持ち出してその場を取り繕っておりました。従って宗教について厳密に言えばわたしは、無神論者でもないわば無関心な人間としか言いようがなかったと思います。

眠れない夜

そのような中途半端なわたしでした

が1994年の晩春のある夜、なぜか目がさえて眠れなくなりました。いつしかわたしは自分の過去を振り返り自問自答していました。己の思想、行動、対人関係、社会関係などはたしてそれは充実した人生と言えたかと考えると甚だ不満で心もとなく、考えれば考えるほど無常観にさいなまれました。この不安とむなしさを解消し、残された人生に安心立命を得たい、生きる意味とその道を見出したい、それを探り出すための具体的な方法は何かを真剣に考えました。そのときふと頭にひらめいたのが、3年前に頂いた『モルモン書』でした。

御霊に満たされたレッスン

わたしは朝起きると早速妻に夜中の出来事をすべて打ち明けて相談しました。教会員である妻は、宣教師を家に招いてレッスンを受けてみたらと勧めてくれました。こうしてわたしは、キリストの道を歩みだすことになったのです。

レッスンを受けて3日目、神会の御三方と人の交流についてメモに図解しながら説明を受けておりました。そのときわたしは次第に胸が熱くなりこみ上げてくる高ぶりを感じ、不覚にも感涙にむせこんでしまったのです。あえて不覚と表現いたしましたのは日本男児たるもの人前で涙を見せるのは恥と教えられてきたことによります。よってそのような気持ちと経験はわたしにとってまことに不思議としかいいようのないものでありました。今そのことを考えてみると、わたしの切なる願いに対して神が投げかけられた慈愛の光がわたしの心の琴線に触れたとしか表現できません。

その後、レッスンをしてくれたストーカー長老はわたしの顔を見ると必ず念を押すように『モルモン書』を読んでいますかと言いました。そしてジョセフ・スミスとイエス・キリストとの出会いの場面を何度となく読み返しているうちに、天界の御三方を強く意識するようになり、次第に確信へと変わってまいりました。

人生の目的を見いだして

目的のない無意味な人生を生きてき

東京神殿において結び固めの儀式を受けた中山ご夫妻



たわたしですが、『モルモン書』という宝を手にし、日々悔い改めによる前進をしながら平安と希望に満ち、福音に生きるという生きがいをひしひしと感じています。

76歳の老骨ですが、さらに信仰を深め与えられた教会員の召しを果し、恐れず神の御心を果たしていきたく思っている次第です。

「わたしの愛する同胞よ、あなたがたは、御父が御子イエス・キリストに真に従う者すべてに授けられたこの愛で満たされるように、また神の子となるように、熱意を込めて御父に祈りなさい。また、御子が御自身を現されるときに、わたしたちはありのままの

御姿の御子にまみえるので、御子に似た者となれるように、またわたしたちがこの希望を持てるように、さらにわたしたちが清められて清い御子と同じようになれるよう、熱意を込めて御父に祈りなさい。アーメン。」(モロナイ7:48)

わたしは、これからも残された人生を、信仰と希望と愛をもって生きていきたいと思っております。神の慈愛に感謝し、わたしに福音に生きるきっかけを与えてくれた宣教師、日々助けを与え励ましてくださる兄弟姉妹、そして妻に感謝しております。この福音が真実であることを証いたします。(なかやま・としお 第二副支部長)

主から与えられた出会い

——祈りの小さな奇跡——

大阪ステーキ枚方ワード
川端敬子

昨年10月にステーキ宣教師として召され、伝道の業に携わるこの機会に心から感謝しています。この責任に召されて以来、神様にお祈りしてきたことは、「わたしの助けを必要とする人に出会えますように」ということでした。わたしはほんとうに主の道具となり、福音の喜びを伝えたいと願っていました。

英会話での出会い

召されてから5か月が過ぎたころ、英会話にとってもやんちゃでかわらしい玲香ちゃんという女の子がお母さんと一緒に参加するようになりました。彼女は、一見すると英会話に来ているほかの子と何ら変わらない、普通の元気な子でした。

ところが、ある日お母さんから、彼女は学校でひどいじめに遭っていて、今は学校をお休みしていると聞きました。

お母さんは、教会へ行ったら玲香ちゃんの心が慰められるのではないかと思い、いろいろな教会に参加されたそうです。中でも、末日聖徒イエス・キリスト教会に行ったときに、ほかのどの教会とも違う何かを感じられたそうです。

そこで、自宅に近い枚方ワードを電話帳で見つけ、英会話に通うようになったということでした。

心打ち解けて

そのような事情を聞いて、玲香ちゃんにすぐにでも教会のレッスンをしたかったのですが、まず彼女が十分わたしや教会員に打ち解けることが先だと感じ、レッスンをするのは気長に待つことにしました。また、いじめの事実については、わたしからはあえて聞かないようにしました。

それから、英会話で毎週玲香ちゃんと会って少しずついろいろな話をしていくうちに、ピアノが弾けることを知り、ワードの音楽委員長でもあるわたしは聖餐会でピアノの伴奏をお願いしてみようと思いました。玲香ちゃんは、快く引き受けてくださり、わたしの指揮と合うように一緒に練習しました。無事に聖餐会での伴奏が終わると、彼女は小声で教会についていろいろな質問をしてきました。わたしは、それらの質問に答えながら神様がわたしの祈りを聞いてくださったという気持ちを

感じ、主の道具として彼女を助けるために自分をささげようという決心をしました。わたしたちは、こうして、次第に打ち解け合うようになっていったのです。

祈りのチャレンジ、バプテスマの決意

あるとき、玲香ちゃんが「わたし、川端姉妹と二人だけで話したい」と言ってきました。そこで、教会の部屋の片隅で二人で話をしました。すると、自分はいじめを受けていて学校に行っていないということを泣きながら話してくれました。みんなが玲香ちゃんのことを無視するので、学校へ行っても友達がいらないのです。あまり、人に知られたくないことをこうして話してくれた玲香ちゃんの勇気に感謝しました。わたしは、神様のことや、イエス様のことなどを話した後で、「どうぞ、意地悪をする人たちのために祈ってください」と言いました。1か月後には新学期が控えていましたので、まず、4月の始業式を目標に毎日祈るようチャレンジしました。

それから、数日後、今度は「バプテスマを受けたい」と言って、わたしを驚かせました。まず、お母さんに相談してからと言いましたが、「自分で決めます。わたし、宣教師のレッスンを受けてバプテスマを受けます」と、決意は固いようだったので、わたしから

もお母さんをお願いすると「娘に任せられていますから」と快諾してくれました。

祈りはこたえられる

無事にレッスンも終わり、目標だった4月27日、そして玲香ちゃんの誕生日の3日前に、霊的なすばらしいバプテスマ会を開くことができました。もちろん、お母さんも参加してくださいました。

また、あのチャレンジから1か月間、毎日祈り続けた玲香ちゃんは、4月の始業式に勇気を出して学校へ行きました。すると、今までのことがうそのようにみんな気軽に彼女に声をかけてきてくれたのです。そして、新学期が始まって3か月がたとうとしていますが、玲香ちゃんは遅れた勉強を取り戻すのに必死になりながらも、楽しく学校へ行っています。もちろん、教会へもこれまで以上に強い信仰と証を胸に元気に集っています。

「すべて重荷を負うて苦勞している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう。……わたしのくびきは負いやしく、わたしの荷は軽いからである。」(マタイ11:28; 30)

神様は確かに生きています。イエス・キリストはわたしたちの贖い主、救い主であることを心から証いたします。(かわばた・けいこ ステーク宣教師)

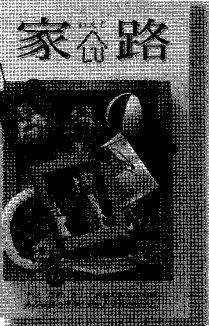


バプテスマ会にて。左から2人目が川端姉妹、左から4人目が山田玲香ちゃん。その右隣がお母さんの山田恵子さん。

ブックセンター
だより

新刊のお知らせ

●家路(ビデオカセット)
カタログ番号:
53062 300
VHS 32:30 650円



娘を亡くした家族が福音によって助けられ、幸福を見いだす物語。イエス・キリストの福音を受け入れるときにもたらされる喜びに満ちた変化を描いている。

専任宣教師

JMTC 214期生22人 海外2人 ●上から氏名、任地(伝道地)、出身ユニット



小川秀哉
福岡伝道部
札幌ステーキ
厚別ワード



武井雅弘
福岡伝道部
我孫子ステーキ
松戸ワード



阿部勝利
札幌伝道部
山口地方面
防府支部



堤吉規
岡山伝道部
名古屋ステーキ
岐阜ワード



井上正之
福岡伝道部
横浜ステーキ
上大岡ワード



坂井雄三
福岡伝道部
町田ステーキ
町田第2ワード



エドワード・ジョン・マーフィー
福岡伝道部
神戸ステーキ
関西支部



廣江克彦
岡山伝道部
静岡ステーキ
静岡ワード



門脇道則
福岡伝道部
名古屋ステーキ
名東北ワード



高澤仁
東京南伝道部
盛岡地方面
盛岡支部



堀田小緒里
福岡伝道部
名古屋ステーキ
御器所ワード



高谷望
岡山伝道部
札幌ステーキ
函館ワード



吉田由美子
福岡伝道部
我孫子ステーキ
我孫子ワード



佐藤貴美子
神戸伝道部
仙台ステーキ
古川支部



中田紀子
仙台伝道部
沖縄那覇ステーキ
那覇ワード



伊藤美保
東京北伝道部
札幌ステーキ
岩見沢支部



宮川弥生
東京南伝道部
大阪堺ステーキ
泉南ワード



徳岡好美
仙台伝道部
神戸ステーキ
北六甲支部



中香里
東京南伝道部
三重地方面
四日市支部



安富清美
東京北伝道部
福岡ステーキ
福岡ワード



折戸優子
仙台伝道部
神戸ステーキ
明石ワード



笠裕子
名古屋伝道部
福岡ステーキ
久留米支部



鈴木康弘
カルフォルニア・
ロスアンゼルス伝道部
東京南ステーキ
渋谷ワード



内田幹子
カルフォルニア・
サンノゼ伝道部
静岡ステーキ
沼津支部

役員の変動

1997年5月15日から6月7日までに管理本部会員統計記録課に通知のあった役員の変動(敬称略)

- 我孫子ステーキ水戸ワード
監督:長谷川道夫
- 東京南ステーキ洗足池ワード
監督:Nelson,Kent Allen
- 横浜ステーキ小杉支部
支部長:田中精也
- 福岡ステーキ八幡支部
支部長:Richards,Ryan Spencer
- 郡山地方面
地方面長:神尾茂
- 郡山地方面津若松支部
支部長:栗城健至
- 長野地方面長野支部
支部長:Williams,G Burchar
- 奈良地方面名張支部
支部長:秋野政雄
- 奈良地方面奈良支部
支部長:泉川賢二

新設ユニット

- 我孫子ステーキ我孫子ワード
(旧我孫子支部)
監督:三輪秀世
- 長野地方面上田支部
(長野支部から分割)
支部長:若林 潔

皆さんの原稿を募集しています

◎ご投稿の際には連絡先(住所、電話番号)、教会での責任(役職名)、所属ユニット名を記入し、写真を同封のうえお送りください。原稿は一部手直しさせていただくことがあります。

◎お願い——海外に召される日本人宣教師たちを紹介いたします。伝道の召しを受け取り次第、編集室に写真を添えてお知らせください。(氏名〔フリガナ〕、伝道部名、召された月を明記)

◎あて先:〒106 東京都港区南麻布5-10-30 末日聖徒イエス・キリスト教会『聖徒の道』編集室

☎03(3440)2666 FAX 03(3440)3275